兵の權悉く其の一身に集まるや、内は幼主を敎導誘廸し、外は老臣宿將を鎭壓愛撫し、賢良を進め、姦邪を遠ざけ、財力を養ひ、風俗を正せり。特に幼主の師友其の人を擇ぶことに心を用ゐ、戒法五章を出して君側の人をして其の心術を格せしめ、又制法三條を一般に布告して俠に士風を張りしが、姦邪猶未だ息まざるを以て、以爲らく疑を以て疑を脫するは禪侶の智なり、概を以て概を拔くは工匠の才なり、惡を以て惡を除くの計なかるべからずと、遂に法師の如き者六人をして異服異巾を著け、大小二刀を佩び、營中に徘徊して義滿及び諸將士と游狎せしむ。此の輩競ふて諛言を爲し媚言を呈し頗る俳優者に類す、之を名けて佞坊といひ、又奸坊といひ、後其の童子を扮裝するを以て童坊といふ。而して其の名を隨阿彌陀佛、本阿彌陀佛、照阿彌陀佛、波利阿彌陀佛、亮阿彌陀佛、觀阿彌陀佛と稱す。諸將士の中其の擧動の此法師に類する者なれば、指して士童坊として之を嗤笑す。故を以て將士等其の名を受けんことを恐れて自

省する者多く、諂諛の風大に改まりしといふ。以て賴之が禪の素養により得來れる應機の作畧一斑を見るべし。又專ら勤儉を尙び、政を執ること纔に數年にして在京の諸侯盡く遊宴を廢し、奢侈の風頓に革まり、倡優の輩苑と其業を失ふに至れりといふ。賴之少時頗る遊獵を好みしも、中年以後全く之を廢し、心を淨域に歸して猶在家の僧の如し。元策禪師之を記して曰く

平素蔬食淡飮、終日超々然、揮塵談玄、有斐休麗蘊之風、

と、其の境界の脫洒なりしこと想見するに足る。初め貞治六年義詮に召されて讃岐より京師に入るや、未だ將軍に謁せざるに先づ釣寂碧潭の室を扣き法要を問ひしといふ。義滿年長じて志漸く滿つ、諸將を役して大に室町の第を營み花の御所と稱す、驕奢太甚し、賴之これを諫むれども聽かず、互に嫌隙あり近臣從てこれを譖す。康曆元年四月義滿、賴之の職を解き讃岐に遣歸す。賴之即ち剃髮して常久と號す。賴之前將軍の遺命を受け義滿を輔導し以て足利氏の武威

を恢張したるの功は甚だ偉大なるに、一朝此の不祥の事に遭ふ、頼之をして若し凡常の人たらしめば、必ずや憤忿の情に堪えざりしなるべしと雖も、流石に深く禪觀に達したりしを以て、渠は夷然として初めより勢位に居らざりしものゝ如く、其の述懐の詩を見るに、只小人の退け難く大功の立て難きを歎せしのみにして、毫も怨嗟の意あるを見ず、其の詩に曰く

人生五十愧無功、花木春過夏既中、
滿室蒼蠅掃難盡、起尋禪榻臥清風、

と、直に海南の途に上るに臨み一物の携ふるなし、只杜少陵の詩集一篋ありしのみなりきといふ、其の風概の高快なる欽すべからずや。既にして義滿の疑惑漸く消散して、明徳二年再び召還され入つて軍國の大事を參決す。翌年三月溘焉として逝きぬ、夫人光眞薙髪して玉淵と號す、嘗て鐵舟和尚に從て道を問ひ、又宗鋭禪師に參じて心法を發明す。法性院を創めて往來の尼姑を度し、常に門度を衆めて五部大乘經を寫す、惠林岱雲之を評して曰く

雖居塵勞、而不被塵勞纏縛、雖處富貴、而不受富貴薰染、可謂紅爐優鉢、汚泥芙蕖、安知非夙乘菩薩願力、來現婦女質哉、

と蓋し頼之にして始めて此の室あり、此夫人にして始めて能く頼之の室たるに足る。桂巖居士と光眞夫人とは、豈龐蘊夫妻の再現したるものに非ざるなきを得んや。（禪宗雜誌に依る）

室町幕府第一流の人物細川頼之は實に如上の風格を具へたるの人なりしなり。入つては幕府の輔相として政兵の權を執り、出でゝは黒衣の一老居士、禪榻を尋ねて清風に臥するのみ、胸中落々として些の滯芥なく些の煩懣なし。之を蓋世の英雄第一世拿翁がセントヘレナに流竄せられて、日夜煩悶、幾くならずして遂に懣死せるの末路に比すれば、其の性格の高卑如何ぞや。

蘇軾字は子瞻、眉山の人、東坡と號す。宋の嘉祐の初め進士に登り史館に直す、

元豐三年黃州に謫せらる。時に佛印了元、歸宗に住す軾與に酬酢す、妙句煙雲と麗を爭ふ。黃より汝に徙さる。因て廬山に遊び、東林に宿して照覺常總と無情話を論じ省するあり、黎明偈を呈して曰く、

溪聲便是廣長舌、　山色豈非清淨身、
夜來八萬四千偈、　他日如何擧似人、

又曰く、

橫看看嶺側成峰、　遠近看山了不同、
不識廬山眞面目、　秖緣身在此山中、

荊南に抵り、玉泉承皓の機鋒觸るべからずと聞き、これを抑へんと擬し、即ち微服して見ゆるを求む。皓問ふ、尊官高姓如何、軾曰く、姓は秤、乃ち天下の長老を秤る底の秤。皓喝して曰く、且道へ這一喝重多少ぞ。軾對ふるなし。此より益す禪を重んず。未だ幾くならずして陽羨に歸る、舟爪步に次る。書を以

て金山了元に抵る曰く、必ずしも山を出でず、當に趙州上等人を接するを學ぶべしと。元書を得て徑ちに來る、軾迎へ笑て之を問ふ、即ち偈を說いて曰く、

趙州當日少謙光、　不出山門見趙王、
爭似金山無量相、　大千都是一禪床、

軾掌を抵て善と稱す。登州に知たりしとき石塔戒來て軾を迎ふ、軾曰く、吾一たび石塔を見んと欲す、行の速なるを以て及ばざるなり。戒起つて曰く、看よ這箇は是れ甎浮圖か、軾曰く、縫あるは奈何、戒曰く、若し縫なくんば爭てか世間の螻蟻を容れ得るを解せんと、軾爲めに首肯す。元祐丙寅翰林學士に除せらる、已已出でゝ杭州に知たり、復た金山を過き了元に謁す、留まること數月、元が所居の方丈は妙高臺と名づく、軾詩あり曰く、

我欲乘飛車、　東訪赤松子、　蓬萊不可到、　弱水三萬里、
不如金山去、　淸風半帆耳、　中有妙高臺、　雲峯自孤起、

仰觀初無路、誰信平如砥、臺中老比丘、碧眼照窓几、
巉巉玉爲骨、凜凜霜入齒、機鋒不可觸、千偈如瀉水、
何須尋德雲、只此比丘是、長生未暇學、請學長不死、

壬申揚州に知たり、一日石塔侍者を遣はして院事を解かんことを求む。軾問ふ、長老何くにか往く、對ふ、西湖に歸らんと欲すと、遂に僚佐を率ゐ同じく石塔に至る、皷を擊たしめ袖中より疏を出し晁無咎をして之を讀ましむ、曰く、

大士何曾說法、誰作金毛之聲、衆生各自開堂、何關石塔之事、去無作相、住亦隨緣、惟戒公長老、開不二門、施無盡藏、念西湖之久別、亦是偶然、爲東坡而少留、無不可者、一時稽首、重聽白槌、渡口船廻、依舊雲山之色、秋來雨過、一新鐘鼓之音、

九月召れて禮部尚書兼端明侍讀學士と爲る。甲戌惠州に安置せらる。舟金陵に次り、風に江濟に阻てらる蔣山の泉萬卷を迎へ至り、問ふて曰く、如何なるか是れ智海の燈、泉偈を以て對へて曰く、

指出明々是甚麼、擧頭鷄子穿雲過、
從來這盌是希奇、解問燈人能幾箇、

軾欣然亦偈を作つて曰く、

今日江頭天色黑、砲車雲起風欲作、猶望鐘山喚寶公、林間白塔如孤鶴、
寶公骨冷喚不應、却有老泉來喚人、電眸虎齒蹙霹舌、爲伞吹散千峯雲、
南來萬里亦何事、一酌曹溪知水味、他年若畫蔣山圖、仍作泉士喚居士、

泉偈を說いて曰く

脚下曹溪去路通、登堂無復問旛風、
好將鐘阜臨岐句、說似當年踏碓翁、

軾惠州に在り、了元書を致して曰く、

子瞻中大科、登金門上玉堂、遠放寂寞之濱、權臣忌子瞻爲宰相耳、人生一

世間、如白駒過隙、三十年功名富貴、轉眄成空、何不一筆勾斷、尋取自家本來面目、萬劫常住、永無墮落、昔有問師、佛法在甚處、師曰、在行住坐臥處、着衣喫飯處、屙尿撒尿處、沒理沒會處、死活不得處、子瞻胸中有萬卷書、下筆無一點塵、到這地位、不知性命所在、一生聰明要做甚麼、三世佛則是一箇有血性的漢子、子瞻若能脚下承當、把三二十年富貴功名、賤如泥土、努力向前、珍重珍重

庚辰朝奉郎に復す、辛巳嶺を度り北歸す、常州に中止し老を請ひ本官を以て仕を致す。南遷の日阿彌陀佛像一軸を携ふ曰く、此れ軾が西方に生るゝ公據なりと、是に至り疾革まる、徑山惟琳來り侯す、曰く、端明にして西方を忘るゝ勿れ、軾曰く、西方無きにあらず、但箇裡力を著し得ずと、語畢て逝く、嘗て自己の照容に題して曰く、

心似已灰之木、身如不繫之舟、

間汝平生功業、　黃州惠州瓊州、

東坡は宋代の絶世才子なり。由來才子に缺くる所のものは、其の脚踐下を按ずる能はずして、蕩地鋭進を欲するに在り。故に一たび蹉跌するや、意氣忽然として沮敗し、焦熱地獄の鐵壁裡に墮落して、七轉八倒、髮をむしり面を抓き、終に自ら殘死するに至る。唐の柳宗元の如き文章學術、東坡の遙に師事する所、而も渠は才子の末路に漏れずして悲慘なる死を遂げたり。彼れ鬚蘇何者ぞ、絶世の雄才を抱きながら、黃惠瓊等の海隅に流謫せられ、終生失意の中に顚轉せり、而して其の辭を漏し文を吐く、洒脫自在毫も苦惱の味なし、若し禪觀に得るにあらずんば恐らくは柳が蹤跡を追へるならん。禪の品性を高うする其れ此の如きものあるなり。

第二十三章

膽氣

膽力養成、力士大浪の話、織田信茂、茶道利休、豐太閤、義公と心越、南洲の膽氣

膽力養成なる四個の文字は、近時青年社會に於ける理想の一部を表明し、啻に口に之を唱ふるのみならず、立派に事實に履行して相應の成績を收むる者も亦鮮なからず。是れ實に喜ぶべきの現象にして、因て以て現時流行の毒疫たる懦弱卑怯を根本的に撲滅し得べきなり。從て膽力養成に關する著書論文の世に現はるゝ亦甚だ少ならず、余も亦嘗て小著を公刊したることあるを以て、こゝには再び之を詳記するを避け、例に從て修禪者の一二小話を掲げ、禪の膽氣を養ふの効果如何を示す。

言ふまでもなく、禪は生死流轉の塵垢世界を超脫して、平等法界に高蹈濶歩するものなれば、眞個に禪觀の深きに達したるものは、十二分の膽氣を具備すべき筈にして、初より卑怯懦弱の小丈夫輩が指を染むべきの事柄にあらず。併しながら醇酒

は少量と雖ども能く神經を興奮せしむるの作用を帶ぶ。卑怯懦弱の小丈夫と雖ども、其の修養の如何に因りて、俄然として豹變するの奇特なきにしもあらず。力士大浪の談話の如き亦其の一に數ふべきなり。

力士大浪とは同じ力士とはいひながら、片田舍の小相撲の、而もふんどし擔ぎ中の最も弱き者なりき。

高津柏樹翁明治の初黄檗山の知客寮に在勤のをり、本山の使僧となりて九州に下らんとし、留守には此山和尙を請じ置かんために、そが自坊なる讃岐國波止濱圓藏寺を訪ひて、此山和尙及び檀徒に之を談じ、日に九州へ航する便船のあるを待ちき。時たま〳〵波止濱より程遠からぬ今治藩に、藩侯抱への横綱大關陣幕久五郎一行の相撲ありて、その土俵入りの評判高かりければ、檀徒等翁がつれ〴〵を慰めんとて誘ひぬ。此の日はじめて大浪を見たり、其の年の頃は未だ三十に滿たず、骨格たくましき偉丈夫にして、誰が目にも五六十枚より上の

力士と見え、決して田舎相撲の樣かつぎにあらず。此の日も弓振の役をつとめ大に喝采を得たりきといふ。

今治の興行を打上げて後、大濵らは波止濱圓藏寺に來り寓し、陰曆の十二月より年明まで寒稽古を初めぬ。乃ち檀徒等また翁を饗應する爲めに、夜ごとに大濵等をして相撲甚句を踊らしめて興を添へたり。あるとき年寄にやあらん、翁に語りけるは、和尙樣の見たるが如く、大濵は軀幹太く膂力も人にまさりて強けれども、惜むらくは氣象弱くして、師匠兄弟子などに勝ちがたきものと諦め居るには困じ果てね、何か善き方便もて敎へたまへかしと切に請はれしかば、翁は打笑ひ、大濵に向ひて、貴樣の名は大濵ではないか、役に立たぬ、坐禪して強くなれと、笑談半分に云はれしに、愚直なる力士大濵は、和尙樣きつと勝てますかと問ければ、翁は此處ぞと思ひ、きつと勝てるぞ坐禪を爲せ、どうでも好いから本堂で安坐をかいて考へろと答へ、力士は本堂へ行く、翁は他の客と

話し其の夜は大濵の事を忘れて主客各々眠りに就けり。さて翌日の夜となり其の日の評判を聞けば、力士大濵は實に大濵となれり、昨日とは全く人を異にし、前頭も取つて投げたり、小結も投げたり、關脇も投げたり、田舍なれども大關は大關なるに、美事に取つて投げたり。大濵の評判噴々となり、翁は大悅びに入り、大濵々々坐禪せしは如何やと言葉せはしく問ひければ、大濵は滿面に喜色を湛え、お悅び下されまし、昨夜本堂の柱に倚りかゝり考がへましたが、何んにも思ひつくことは有りませず眠くなるのみ、ふいと手を腰の烟草入に突きこみましたら、鐚錢が指にさわりましたにしか通用せぬものでも錢は錢に違ひなく、鐚錢がなくつては世の中の人がこまる、私も鐚錢のやうな者ですが、矢張り世の中に無ければならないものと考へ出しました。さうなりますと鐚錢ばかりが必の中に考がへられ、段々と鐚錢は一文二文と長くなり、終に山も川も鐚錢となり、世界中が丸で鐚錢となりま

した。それから私の名は大浪といふから浪といふことを考がへ初めましたら、段々と考へが浪ばかりになり、本堂も浪、多度津も浪、四國も浪となり、私は大浪となつて了ひました。其れから急に強くなり、夜が明けると太鼓が聞える、小屋へ入る、勝負となる、私の眼にも心にも浪の外はありません、大浪で荒れて荒れて、誰でも彼でも打ち倒さうと思ふばかりでしたと笑ひつゝ其の日の大勝利を語り出でたりとぞ。力士大浪は錙銖より平等を觀じ、大浪の名より心身を全く浪となし、終に胸中に一點の疑惑なく、前後左右を顧みることなく、端的にして大勝利を得たるなりけり。恐らく其の日大浪が土俵に上りし時の姿は、金剛力士の如く、釋尊が獅子の座に立たせたまひしが如くなりしならん。渠は本堂の柱に倚りかゝり、大胡坐をかき兎に角に一旦は大悟せしものといふべし。

（日本宗教に載せたる相樹翁の談）

孟子いへることあり、能はざるにあらざるなり、爲さゞるなりと。即今多少の青

年、自ら萎縮退嬰して、我能はずといふの輩は、少しく此の片田舍の禪相撲の話頭を鑑みて可なり。

我が鄉の古武士に渡邊鄉兵衞といふものあり、剛勇無雙と稱せられにき。ある時若き者打寄つて話の內に、途中にて大入道（怪物）に遇ひたらば如何すべきと問ふものありたれば、或は切り伏せんといひ、或は組敷かんといふ。時に鄉兵衞默然としてありしが、人々渡邊氏は如何になさるべきやと、尋ねけるに鄉兵衞、我れ大入道に遇ひたる時は、先づ安座して目を閉ぢ念佛十遍ばかり唱へ、眼を開き見てまだ消えざる時は、更に挑灯を消し又十遍ばかり唱ふべし、然るときは消え失せぬべしと答へたりと。

此の人固より禪定を修したりといふにあらざれども、其の心意を不動の地位に置き、泰然として落つき拂ふところは、亦修禪者と符節を合するが如きの點あり。

尾張の藩士織田平治郎信茂松蔭に來りて白隱に參す。白隱問ふて曰く、前來何

事をか爲す。信茂いふ、我平生法を聞くことを好む、此を以て病を感ず。白隱いはく、汝の病如何。信茂いふ、我始め一禪師に逢ふて心性の理を探り、又律師に會ふて秘密藏を問ひ、二宗に於て疑惑を生じ、阿字觀の中によりて乍ち地獄の相を生ず。心性の理を以て之を制すれば、二見こも〳〵爭ひ心意寧からず、寢ねては惡夢を見、寤めては思想を勞するのみ。白隱咄して曰く、還て地獄を恐るゝ底のものを識るや。信茂いふ、空見這の病を感ず。白隱連喝に喝散す、曰く、這の小奴子、夫れ士たる者は君のために忠を竭くし水火を避けず、身を鋒刃に寄せて、骨撓まず目瞬かず、汝何ぞ空見を恐るゝや。即今一々地獄に墮して點檢して看よ。信茂いふ善智識何ぞ人をして惡道に墮せしむるや。白隱笑つて曰く、老僧が墮する底の地獄八萬四千所、汝看よ一所として老僧が墮せざる底あることなし。信茂之を聞き歡喜して禮拜し、且いふ、願くば照心すべきの書を示したまへ。白隱曰く、我授與する所廣博なり、汝得て見るべからず。信

茂いふ、縱ひ萬卷なるも我豈に敢て辭せんや。白隱良久しうして曰く、咦、此を去て門を出でば便ち往來の絡繹たるを見よ、左右の館舍を見よ、茶店を見よ、驛路の夾松を見よ、涸軒を見よ、府に到り、兩國橋上の往還、淺草寺裡の緩閙、朝より暮に至るまで、那時か打失、那時か不打失を試むべしと。信茂再拜して去りぬ。

白隱が一服の興奮劑、能く箇の怯懦漢をして回春蘇息に向はしむ。即今天下の大宗師、能く柔弱子弟をして一轉して膽氣旺盛の士とならしむる底の手腕を有するものありや。凡そ人情の弱點は自己の暗黑面に接著するときは、恰も惡魔の手に觸れしが如く、急遽倉忙、心意を自己の暗黑面を看得ざるに在り。時に獨坐靜觀して、他の別個の方面に轉じ去る。是れ實に怯懦中の怯懦に相違なきも、滔々たる眼横鼻直の徒、常に箇の怯懦裡に坐在して、自ら屈辱を取るもの多し、何ぞ獨り尾張の織田某なるものを笑ふべけんや。外に對するの怯懦は醫するに易し、内に對するの怯

懦に至つては、其の人自ら之を醫するを求めざるのみならず、仁者あり之が救藥を欲するも醫肯實に容易に療し難し。こゝに好個の方便あり、名づけて祖庭の鉗鎚といふ、毒惡辛辣、棒喝亂下、直下に病者の身命を奪ひ去る、復何ぞ一個半個の怯懦病根を止めんや。此の如くにして死し、此の如くにして蘇息し、而して後に、膽氣旺盛、『千萬人と雖も吾往かん』の意氣を養ふべきのみ。

豐太閤初めて千利休を呼び茶の趣意を質問するや、利休答へて曰く、茶道は猶禪道と義を同うして即ち膽力を錬るものなりと。豐公之を怪むと雖も膽力を錬るの言に感發する所あり、乃ち取り敢へず種々の器物を取寄せ茶を立てんとす。此の時利休が徐ろに襖を排き茶碗を持出づるや、襖の影に潛める豐公は大身の槍を拔き放ち利休が鼻端に突悉けたり。利休眼少も眴はず神色自若として槍の穗尖に目も暮れず茶を立てたり。是に於て豐公膝を屈し自ら誤れるを謝し、利休に師事して茶事を習へりと云ふ。是よりして軍陳に在ても常に利休を具して

茶を樂み一日の宿陣にも釜を懸けざることなかりき、利休乃ち旅館筒を造る、是れ今日傳ふる所の旅筵筒なり。

利休は徹々たる一の茶坊主のみ、而も其の道よりして禪三昧に入り、曠世の雄材豐太閤をして節を折て感嘆せしむるに至る。況んや眞正の修禪悟入の者に於てをや。豐公卓落、全國の紛擾を一掃す、其の兵馬倥傯の間、茶を點じて以て神氣を靜養す。其の人打坐默念の枯禪を修せずと雖ども、悠揚不逼、優に禪三昧に入る。豈辭世の一句を見すや、

露と置き露と消えぬる我が身哉浪華の事は夢の世の中

豪華にして而も濶濶、絶えて愴々傷神の態なし。得る所なくんば遂にこゝに至らざるなり。

水戸の義公、ある時心越の膽力を試みやうと思ひ、和尚を招き大杯を出して酒滿々とつぎたり。和尚推し戴きて飲まうとするとき、次の間で大砲をズトンと

打つ、さしもの心越驚くかと思ひの外、少しも騷げる氣色なく、一滴も殘さず飲み乾したり。そこで光圀卿只今は失禮したと謝しけるに、和尙、鐵砲は武家の習ひ、別に御斟酌にも及ばぬと答へぬ。それより光圀卿其の杯を受けてこれも亦滿々とつがせ、いざ飲まうとするとき、和尙威を振ひ一喝を下したり。光圀卿不意のことゝて驚いて杯をひつくり返し、和尙何をなさるといふに、和尙平氣で、棒喝は禪家の常、別に斟酌は仕りませぬ。

眞個に是れ青天の霹靂、而かも蚊虻の山に觸るゝが如し。

近時膽の偉なる人、南洲西鄕先生の上に出るものなかるべし。海舟伯の談片に曰く、白隱と云ふ一人の禪僧があつた、これは近代の聖僧である、此の和尙の寺の門前に一軒の豆腐屋があつた、其家の娘が不圖妊娠した、兩親は痛く驚き詰責すると、娘は實はお寺の和尙さんと云々して妊んだと白狀した、そこで兩親も大に喜び和尙樣の御胤であるならとて產み落させ、大切に育て上げた、二三年立つと彼の娘が實

に濟まないと考へついて實を吐いた、そこで其の小兒は白隱の胤でないといふことが分つた、故に兩親も大に驚き直に寺に至り白隱に向ひ前後の始末を話し大に謝まる、すると白隱はハアソーカと一言いつたばかりであつた。ハアソーカが中々大きなものだ、天下の事凡て春風の面を拂て去る如き心胸、此の度胸あつて始て天下の大局に當ることが出來る。西鄕は流石に此の間の消息を解し居た、江戸城受渡の折、一時の美談がある、是は一翁(大久保)より聞いた話だ、ある時老夫と西鄕との談判で雙方五人づゝの委員を擇び、城受渡の式をすることにした、西鄕も一翁も其の一人で老夫は加はらなかつた、其の時は殺氣全部に充滿すと云ふ形勢で中々汕斷が出來なかつた、それで城受渡に來る官軍の委員等も非常の警戒で、堂々たる官軍の全權委員の一人が、狼狽の餘り片足に草履を穿きながら玄關を昇つたといふ奇談も殘つて居る位だ、此の中で西鄕は優然として少しも平生に異ならず、實に貫目があつたといふことだ、實に驚いたは城受渡に關する色々の式が始まると、西鄕先生居睡り

を始めた、此の式が濟んで外の委員が引取るも、猶ほ先生〳〵らり〳〵遣つて居る、すると一翁傍よりたまりかね、西郷さん〳〵式濟んで皆さんがお歸りで御座ると揺り起せば、先生ハアーといひつゝ痰とぼけ顔を撫でつゝ、悠然として歸り行きしと、一翁もひど〳〵感心して居た、中々ふとい奴だ、數十日來疲れて居たもんだから、城受渡しの間に好い間暇見つけた氣で居睡りとは恐れ入るではないか、必竟こゝらが渠の維新元勳の筆頭に數へらるゝ所以だと。

海州老伯は唯〻南洲の大なるを稱せり。大は則ち大なるに相違なしと雖も、吾人は更に其の膽の偉なるに敬服せんと欲す。人能く平時に在りて勇を說き壯を說き膽を說き、氣を說くも、一旦事のおこるに遇へば周章狼狽して見ぐるしき失敗をなさざるは希れなり。況や天下の重任に膺り、治亂安危を隻手に握るの日に於てをや。謙信の少きとき敵を逐ふて、時刻未だ機に適せず、乃ち軍門の中に酣睡す。千古傳へて美談と爲す。而も之を南洲に比すれば亦小々たるを免れず、流石に維新の風雲を

叱咤し、德川氏三百年の牢礎を根底より顚覆し、天智以來の大革命を指顧の內に定むる程の大手腕家は此の膽氣なくばかるからざるなり。先生禪を學び又陽明の學に入る。陽明山人亦一話あり、

王陽明の謫せられて路蹊塘に至るや、江に投ずる爲ねし、脫れて商船に附し舟山に抵る、遇々颶風大に作り、夜闇界に至る、岸に登りて山徑を奔ること數里、一寺を覓て宿を求む、寺僧納れず、野廟に赴き香案に倚りて臥す、夜半群虎廟を遶りて環行し、大に吼えて敢て入らず、天明依然たり、寺僧必ず虎に斃れたりとなし、將に其の囊を收めんとす、陽明が熟眠するを見、相共に驚いて曰く、公は常人に非ずと、迎へて寺に至る。

陽明山人學問儒佛に邃く、又深く禪味を知る。見るべし其膽山の如くなるを。

第二十四章　生死岸頭

生死と宗教、生死と禪、六祖の垂示、生前死後、雪村友梅、船子和尚、死を怕れざる和尚あるを知れりや、香爐上一點雪、天南の老僧、願長の長四郎

生や何れの處よりか來る、死や何れの處にか往く。生や果して樂むべく、死や果して怖るべきか。生や果して厭ふべく、死や果して希ふべきか。是れ哲學上の大問題なり。古往今來此の問題に向て解釋を試みんとせしもの幾ばくぞ、而も一人の能く天下萬衆に向て滿足を與へ得たるものあるか。

生死の問題は到底解釋以外に在り。而も生死は眼前の事實にして、之がために笑ひ、之がために泣き、之れがために喜び、之がために悲み、之がために憂ひ、之がために懼れ、之がために動き、之がために苦む。慟哭叫號するも生死を脱すべからず、跳躍怒罵するも生死を逭れ得ず。生死の働きは無始無終に繼續して、人間の煩

懣は益す盛なり。所謂宗教なるものは畢竟此の人類共通の弱點に投じて巧みに籠蓋の策を施すものにあらずや。見よ、安心立命是れ何事ぞ。生を樂み死を怖るゝの念を除却するの謂ひにあらざるか。天下萬衆何人も一死あるを知得せざるものなし、而して之を恐怖する此の如く甚しきは、死後の境遇を知る能はざるに依る。是に於て乎天帝裁判宗あり極樂往生宗あり(卑近なる意味に於て)、以て幾分なりとも精神の慰安を得、苦痛を減却するの方便と爲す。然れども是等卑近淺薄の宗教は愚夫愚婦の爲めに說くべくして、士君子の腦裡に入るべからず。是に於てか禪や乃ち興る。

禪は大解脱の門なり。一切の羈絆を解き、一切の塵垢を淨盡し、理事一色、圓融無礙にして、宇宙間に於て大自在を得。天空海濶、鳥飛んで鳥の如く、魚游いで魚の如きを以て究竟至極と爲す。禪者の眼中固より物我のあるなし、寧ろ生死の問題あらんや。

六祖慧能將に寂せんとするや、徒衆を集めて曰く、吾世間を離れんと欲す、汝等

疑あらば早く須らく問ふべし、汝が爲めに迷を盡さしめん、吾若し去らば人の汝に敎ふるなからんと。諸弟子聞て皆涕泣す、唯神念のみ神情動せず、又涕泣することなし。師曰く神念小師は却て善不善等の毀譽に動せられず、哀樂生せざることを得たり、餘は則ち得ず。年を山中に數へて竟に何の道をか修したる。汝等今悲泣するは誰をか憂ふると爲す、若し吾を憂へば去る處を知らざるなり。吾自ら去處を知る、吾若し去處を知らずんば、豫め汝等に報せじ、汝等が悲泣するは蓋し吾が去處を知らざるが爲めなり、若し吾が去處を知らば即ち悲泣すべからずと。

然らば去處果して何れの處ぞ。古德云く、悟は啞者の夢を見るが如しと。夫れ水を飲む者は冷暖自ら知る、豈に許多の口舌を費して葛藤を打するを要せんや。若し人あり生死如何と問はゞ『天際日上月下、欄前山深水寒』と答へん。又生死の前後如何と問はゞ、『青山綠水元依舊、明月清風共一家』と答へんのみ。

大凡人間の價値は其の生死の間に處するの擧動如何によりて定まる。余こゝに

感あり、嘗て『臨終壯快譚』なる小著に於て、聊か古來の英傑賢哲高僧烈士の臨に就き其の行事を叙述せしことあり、苟くも生死岸頭に立ちて遊戲三昧を得たる者七八十則を收錄し、無學祖元の白刃頭に臨むに當り『電光影裡斬春風』と朗吟せる、快川紹喜が火炎身を焚くの中に端坐して『滅却心頭火亦涼』の偈を說きしが如き、其他二三の話頭、及び參禪の居士臨終の事蹟は收めて其中に在り。故に今生死岸頭に於ける禪者の行履を載するに當り、凡て之と撞著するものを斐除し、以下の六則を掲ぐ。

雪村友梅、法を一山に嗣ぎけるが、其十八歲の時、海に航して南征し諸名勝に謁して道を求めき。初め元の世祖日本を犯し、軍利あらずして十萬の兵空しく筑紫沖の藻屑となりぬ。仁宗位を繼て將に先志を償はんと欲するの時なれば、師の日本人なるを以て拘えて獄に入れ、鞭笞鞫勘至らざる所なく、遂に及を加へんとせり。されど師は怡然として毫も畏ることなく、靜に無學祖元の偈を朗誦

し、又次韻して一偈を作る、

百城水烟一枝笻、觸目無非是幻空、
童子曾參無厭足、鑪湯爐炭起清風、

刑官いたく感じて之を奏上せしかば、爲めに死を免るされ西蜀に竄せらる。居ること十年、大官互儒の道を問ふ者頗る多く、尋で召し還され、長安に留るもの三年。文宗位に即くに及び、詔して京兆の翠微寺を董さしめにき。緇素其の德風を仰ぐ、號を寶覺眞空禪師と賜ふ。年四十にして歸朝す。

佛光禪師(無畢)後ありと謂ふべし。

船子和尚(德成禪師と諡す)節操高邁にして度量群ならず、心印を藥山に傳授してより道吾雲巖と同道の交を爲す、藥山を離るゝに及びて乃ち二同志に謂て曰く、公等應に各一方に據りて藥山の宗旨を建立すべし、余は率性疎野にして唯山水を好む、藥情自ら遣りて所能なし、他後我が所止の所を知りて、若し靈利の座主に

遇はゞ一人を指し來たせ、或は彫琢に堪へば將に平生の所得を授けて先師の恩を報ひんと。遂に分携して秀州の華亭に至る、一小舟を泛べて緣に隨て日を度り、以て四方往來の者を接す。時人其の高踏を知るなし、因て船子和尚と號す。

道吾後に京口に到て夾山の上堂に遇ふ。僧問ふ如何なるか是れ法身、山曰く、法身無相。曰く如何なるか是れ法眼、山曰く、法眼無瑕なり。道吾覺えず失笑す、山便ち下座し道吾に請問すらく、某甲適來這の僧に秖對す、必ず不是なるありて上座をして失笑せしめしなるべし、望むらくは上座慈悲を吝まざれ。吾曰く、和尚一等に是れ出世す、未だ師あらざるなり。山曰く、某甲甚れの處か不是なる、望むらくは說破せよ。吾曰く、某甲終に說かじ、請ふ和尚却て華亭の船子の處に往き去れ。山曰く、此の人如何。吾曰く、此の人上に片兎なく下に卓錐なし、和尚若し去らば須らく服を易へて往くべしと。山乃ち衆を散じ、束裝して直に華亭に抵る。船子纔に見て便ち問ふ、大德甚麼の寺にか住する、山

曰く、寺には即ち住せず、住せば即ち似ず。師曰く、似ずと、個の甚麼に似ざる。山曰く、是れ目前の法にあらず。師曰く、甚麼の處より學得し來れる。山曰く、耳目の到る所にあらず。師曰く、一句合頭語、萬劫繫驢橛。師又問ふ、垂絲千尺、意在深潭、離鈎三寸、子何不道。山口を開かんと擬して、師に一橛に水中に打落せらる。山纔に船に上る、師又曰く、道べ々々、山口を開かんと擬す、師又打つ、山豁然として大悟、乃ち點頭すること三下す。師曰く、竿頭綠線從君弄、不犯清波意自殊。山遂に問ふ、拋綸擲鈎、師意如何。師曰く、絲悉綠水浮、定有無之意。山曰く、語滯玄而無路、舌頭談而不談。師曰く、鈎盡江波、金鱗始遇、山乃ち耳を掩ふ。師曰く、如是々々と。乃ち嘱して曰く、汝向後直に須らく身を藏す處に蹤跡なく、蹤跡なき處に身を藏すこと莫かるべし。吾二十年藥山に在て秖ふ斯の事を明らむ、汝今既に得たり、他後城隍聚落に住すること莫れ、但だ深山の裡、鏌頭の邊に向て一個半個を覓取して、接續して

斷絶せしむること勿れ。と山便ち辭して行く、行くに方り頻くとして回顧す、師遂に闍黎と喚ぶ、山乃ち回首す、師橈子を竪起して曰く、汝將に謂べり別に有りと、乃ち船を覆して入水して逝く。

昔者阿難、迦葉に問ふ、世尊金襴の袈裟を傳ふるの外、別に何物をか傳へしと。阿難すら猶此の問ひを爲す、況山の別に有りと謂べる固より責むべからず。唯船子の身を殺して夾山を感悟せしめたる如き、古往今來何人が能く之を學ぶべき。船子は其れ禪門の至仁者なる哉。

綠德、九江の圓通寺に住す、適〻大將軍曹翰南征して途次寺を經、寺衆皆驚き走る、獨り師は安坐して平日の如し、翰至れども起たず。翰怒て曰く、長老人を殺すに眼を眨せざる底の將軍あることを聞かずや、師色を正うして曰く、汝も亦死を怕れざる底の和尚あることを聞かずやと、翰之を奇なりとして因て起て敬す。乃ち問ふて曰く、大衆何爲れぞ散じ去れる、師曰く、鼓を擊たば自ら

集らんと。翰將校をして之を擊たしむ、衆皆至らず、翰之を怪む、師曰く、將軍殺心あり、故に至らざるのみと、乃ち自ら起つて之を擊つに皆集る。翰再拜して勝を決するの策を問ふ、師曰く、禪者の知る所にあらずと。

汝も亦死を怕れざる底の和尚ある聞かずや、一句凜然、兩頭共に截斷して一劍天に依て寒し。禪者の知る所にあらず。銀山鐵壁、砲彈も亦透し得ず。綠德も亦黑衣の丈夫漢なる哉。

淸巖法語に云く、鹽山拔隊と但馬月庵と組打の時、二人を組伏せ見れば掛絡をかけたる故に、上より汝は何宗と問ふ、下より答へていふ『月と見て指さすことなかれ』。又上より如何なるか劒刃上の一句と問ふ、下より『香爐上一點雪』と答ふ。又上より消えての後は如何と問ふ、下より答へていふ『とくればおなじ谷川の水』。そこにて悟りたる武士をむざ〳〵殺してはいかゞと引おこしたすけたる。是れ鹽山の拔隊と但馬の月庵とて名ある二人にてかくれなきことなり。

禪宗と見て問ふはくどきと心に月と見て指さすことなかれ。既に劒にて首を打落すなり、此時の末期の心は如何にと問へば、香爐上に雪ふりかゝり、ふるより早く消ゆるなり、首とらば仔細もなきといふ心なり。死て後如何にと又問ふ、とくれば同じ谷川の水、何の仔細もなし。

禪僧の眞面目躍如として見るが如し。

陸軍大尉松崎直臣は薩熊本藩の士なり。深く心を禪要に寄せて坦山に相見す。坦山呵して曰く、這事太だ容易ならず、速に去れと。直臣曰く生死事大、無常迅速なり、然るに小子未だ安心立命の地を得ること能はず、願くは老師大慈、敎示を垂れよと、其言太だ切なり。坦山曰く、古人謂はずや、口の詮する所にあらず、識の識る所にあらずと、禪は口耳の學にあらず、汝もし禪を修めむと欲せば、須らく去つて靜坐工夫せよ。直臣乃ち去つて坐すること良久うして省發する所あり、來りて所見を呈す。坦山叱して曰く、皮相の見、禪何ぞ言語の

上にあらんや。直臣是に於て劍を抜きて奮進し、之を坦山の頭上に擬していはく、正當恁麼の時如何。時に坦山方さに煙を喫す、乃ちいふ、煙管依舊吐濃煙。直臣劍を收めて再拜して曰く、我今日這事を了すと、直に出て去らむとす。坦山蓦直に直臣の胸襟を挑ていふ『生哉全機現、死哉全機現、何論去來説死生』直臣いはく『日沒西山歸路遠、勿勞魯翁老疲身』坦山微々として笑ひ其の手を放ちぬ。直臣これよりいよ〳〵修めて遂に覺仙門下獅子兒の稱あり。後日清交戰の事起るや、直臣歩兵第二十一聯隊の一中隊長として派遣中にありしが、安城渡に於て奮戰して死す。

遊就館中に松崎大尉の畫像あり、一見温厚の長者たり。而して征清役中討死の先驅を爲す。果然坦山老漢の鉗鎚を經來る。

靭州三角山の法遇庵主は潙山靈祐の法嗣なり、嘗て國中荒亂し、賊魁山に入つて師に問ふ、和尚何の財寶があると、師曰く僧家の寶は君に宜しき所に非ず、

魁曰く是れ何の寶ぞ、師聲を震つて一喝す、魁悟らずして刀を以て之に加ふ。道ふ莫れ法遇が一喝、喝の用を爲さずと。當時無學祖元をして『電光影裡斬春風』を唱へしむるも、恐らくは首の地に落つるを免れず。法遇が此の蠻賊に對するの手段なきは乃ち惜むべしと雖も、流石は爲山鞴爐中の衲僧、僧家の財寶を惜し氣なく展べ來て、生死の兩途を眼底に置かざるの膽氣は愛すべきにあらずや。

南總鹿野山の麓秋元村の西に天南寺といふあり、洞門の一禪僧これに住せり。一日近傍の故老子弟を呼で曰く、我明日正午を以て死す、故に留別の宴を開かんと、請ふ來り會せと。人々皆驚き翌日天南寺に會し宴に列す、僧欣々として酒杯を獻酬し、容貌平生に異なるなし、時既に正午に至るも死期に達したる色を見ず、衆皆僧の言を以て詼謔に出るものとし意に介せず。中に一人あり其の食言を責む、僧曰く我が待つ所のもの一人あり未だ來らずと。頃刻にして車を馳せて門に入る者あり、是れ僧の積年最愛したる弟子なり、某の席に就き坐定ま

るや、僧眼を某に注ぎ杯を手にして之に與へんとして右腕を伸べたるまゝ俯して遊く（鈴木無隱）

東海道駿遠二州の間に長四郎といふ賊あり、一行脚の金を偷み取らんとし之に尾し共に旅店に宿し、夜の更るを待ち其の寢室を窺ひ見るに、何ぞ料らん僧は在らずして只一株の柏樹を見るのみ、長四郎大に愕き是れ必ず魔術を行ふの僧なり、佛門に神通ありとは必ず是等のことを謂ふならん、我若し此の術を得ば隱現出沒自在にして盜賊を以て紀文の富を致すも何の難きことかあらんと、翌朝僧と前後し行くこと數里にして一の茶亭に休す。長四郎慇懃僧に禮し魔術を學ばんことを乞ふ、僧曰く、何に因て我が其の術あるを知れるや、長四郎對ふるに前夜の事を以てす、僧曰く、汝惡を隱すなきの心嘉すべし、此の心を以て刻苦工夫を積まで或は得ることあらん、『昔者一僧あり趙州に問ふ、如何なる是れ祖師西來の意、州曰く庭前の柏樹子』と、須らく此の話頭に參究し、晝夜間斷

なくんば必ず我が術を得ん、若し一朝得る所あらば江戸に於て相見んと、姓名を告げて去る。長四郎これより柏樹子の話に參じて寢食を忘るゝに至る、數年の久しき從來の非行惡念は盡く掃蕩して痕なく、一個善良の漢と爲れり、復前日の長四郎に非らず、隣里鄉黨之に化し往々善に移り、從前盜賊の火伴たりし者亦或は農漁の業に就く、隨て人皆長四郎を待つに長者を以てし、子弟の素行修らざる者あれば、其の父兄これを率ゐて敎を請ふ者あるに至る。既にして長四郎豁然得る所あり初て僧の意のある所を知り、東に向て感泣拜謝し直に江戸に到り弟子の禮を執り、居士として駿府近傍に閑居して終るといふ。此の長四郎下顎の長きこと常人に異り故に人呼で顎長の長四郎と稱す。其の死するの前數日親族故舊を會して曰く、我某日を以て死せん敢て諸子の幇助を乞ふと。會する者皆曰く、生を謀るのことは我等皆力を致さん、死に就くのことは請ふ之を固辭せんと。長四郎曰く。死生自ら數の定まるあり、人力の左右すべきに非ず、

我が幇助といふは他なし、期日に至りなば衆皆我が前後左右に坐し、我先づ顯の長い長四郎を唱へん、然らば諸子も亦顯の長い長四郎と和し、此の如く互に唱和する數十回に至らば我坐して自ら逝かんと。是に於て衆皆諾し期日に至り多衆來りて長四郎を圍繞して坐す、長四郎大聲して首めに顯の長い長四郎と唱ふ、衆も亦音調を一にして顯の長い長四郎と和し、之を反覆唱和するに隨ひ長四郎の音聲次第に低く竟に微にして聞くべからざるに及で泯焉として死す。（得庵居士の談）

禪門の定力を得るもの往々死期を豫知す。近時坦山老漢の如き正に其の一例なり。天南の老僧、顯長の長四郎の如き亦能く生死を超脫せる者か、其の臨終の如き一奇事として傳ふるに足る。

第二十五章　結論

修禪の名士、禪と世道、禪と武士道、裴居士の語、南洲遺訓

以上に於て概述したる如く、禪は其の動く時に於て大機大用を現じ、其の靜かなる時に於て品性を高潔崇大ならしむ。其の人物鍛成の功に於て掩ふべからざるものあるは言はずして明なり。是の故に古來英傑の士にして禪を修したるもの、我が邦に於ては時賴、時宗、正成、尊氏、賴之、謙信、信玄、政宗、家光、光圀等を初めとして、近世の西鄕南洲、小原鐵心、勝海舟、山岡鐵舟等僂指するに遑あらず。又支那に於ては、富弼、范仲淹、張俊等輔弼の臣あり、又學者としては陸象山、王陽明、周茂叔の徒あり。文學者としては蘇東坡、白樂天、李翺等あり、其の他宋元の名士大抵禪に參せざる者なし。即今我が邦百般の學藝大に備はり、人の材器を成すに於て略遺憾なしと雖ども、只其の人物を鍛成するの點は或は缺くるなきにしもあ

らず。禪の修養は或は此の缺點を補ふに足らんか。試に其二三を概括して之を略言せん。

禪は人の心靈を昭々地ならしむ(一)。凡そ政治家にあれ法律家にあれ技術家にあれ、學者たり宗教家たり教師たり實業家たるに論なく、心靈蒙昧にして能く事を成し得るものあるべからず。

禪は威儀を正うす(二)。凡そ坐禪に習練したるものは四六時中如何なる場合に於ても惰容あることなし。士君子の世に立つ、威儀嚴然として望で犯すべからざるの容姿あるを貴ぶ。裁判官外交官將校教師大家の主人等に於て殊に其の必要を見るなり。

禪は機鋒を磨く(三)。禪者の相對するや實に一生懸命なり。對手に寸隙の乘ずべきあれば、すかさず突き込み、又突き込まる。此の習練に就ては殊に外交官辯護士等に適切なりとす。

禪は煩惱を斷つ(四)。禪者は曾に哀怒哀樂を顏色容貌に現はさゞるのみならず、又實に內心に一切の煩惱なし。政治家の失敗は多く煩惱の濫なるに由り、事業家の挫折も又煩惱の熾なるに因る。之を坐斷するは禪に如くものなし。

禪は生死を超脫す(五)。禪者は此の糞袋を棄つる古草鞋を脫するが如し。眞正の愛國利民に志ある者、亦生死の外に超脫せざれば濟世の業を遂ぐる能はず。

上擧は其の主要の點なり、其他事に當り物に觸れ、禪特有の利用を發揮すること決して尠なからざるべし。今や武士道論國內に喧しく、經世家一に之を以て民心を繫がんと欲するに似たり。而して禪は實に武士道の根源にして又其の精髓たり。志ある者之を學ばざるべけんや。唐の居士裴休曰く、家に在ては則ち仁義禮樂を張り、天子を輔けて以て世を扶け俗を導き、出家して則ち慈悲定慧を運び、如來を佐けて以て敎を開き生を利す。此を捨てゝ、以て丈夫と爲すなしと。菩薩漢此の意氣なかるべからず。

終りに臨み、近代の偉人西郷南洲先生の遺訓を掲げ、一層禪の活用を彰明せんと欲す。南洲少くして福昌寺無三に參す、無三痛棒熱喝常に惡辣の手段を以て之を接す。又大圓寺是三に請益して洞上五位を受け、遂に天桂老人の平生受用底を徹見して、生死岸頭に大自在なるを得たり。（後に王陽明の學に入る）嘗て門人の爲めに修心の要を示して曰く、

一、誠は深く厚からざれば自ら支障も出來ぬべし、如何ぞ慈悲を以て失を取ることあるべきか、決して無き筈なり、何れ誠の受用に於ては、見ざる所に於て戒愼し、聞かざる所に於て恐懼する所より手を下すべし、次第に其功積むで至誠の地位に至るべきなり。是を名けて君子と云ふ、是非天地を證據に致すべし、是を以て事物に向へば隱すものなかるべきなり、司馬溫公曰く、我胸中人に向て云はれざるものなしと、此の處に至ては天地を證據と致すところにてはこれなく、即ち天地と同體なるものなり、障礙する慈悲は姑息にあらずや、嗚呼大丈夫姑息に陷るべけむや、何ぞ分別を待たん、事の輕重難易を能く知らば、かたおちする氣つかひ更にあるべからず、

一、剛膽なる所を學ばんと欲せば、先づ英雄の爲す所の跡を觀察し、且つ事業を翫味し、必らず身を以て其事に處し、安心の地を得べし、然らざれば只英雄の資のみありて、爲す所を知らざれば、眞の英雄といふべからず、是故に英雄の其事に處する時、如何なる膽力あると試較し、其及ばざるもの、足らざる所を研究勵精すべし、思ひ設けざる事に當りて、一點動搖せず、安然として其事一を斷する所に於て、平日養ふ所の膽力を長ずべし、常に夢寐の間に於て我膽を探討すべきなり、夢は念の發動するに程厚からんことを希ふなるべし、公の德を慕ふ一念旦暮止まず、夢に發するに程厚からんことを希ふなるべし、寤寐の中我の膽動搖せざれば、必ず無懼の夢を發すべからず、是を以て試み且つ明らむべし、

一若し英雄を誤らんことを懼れ、古人の語を取り之を證す、譎詐無方、術略横出、智者之能也、去譎詐而示之以大義、置術略而臨之以正兵、此英雄之事、而智者之所不能爲矣、英雄の事業此の如し、豈に奇妙不思議のものならんや、學で而して至らざるべけんや、

一猶豫狐疑は第一の病毒にて、害を爲すこと甚だ多し、何ぞ憂國志情の厚薄に關からんや、義を以て事を斷ずれば其宜に適ふべし、何ぞ狐疑を容るゝに暇あらんや、狐疑猶豫は義心の不足より發するものなり、

一至誠の域は先づ愼獨より手を下すべし、間居即ち愼獨の場所なり、小人は此處善惡の淵叢なれば、放肆柔惰の念慮起らざるを愼獨とはいふなり、是れ善惡の分るゝ所なれば心を用ゆべし、古人云ふ、主靜立人極と、是れ其至誠の地位なればなり、愼まざるべけんや、人極を立てざるべけんや、

一知と能とは天然固有のものなれば、無知之知、不慮而知、無能之能、不學

而能と、是れ何物なるぞや、其惟心之所爲なればなり、故に心明なれば知又明なる處に發すべし、

一勇は必ず養ふ所あるものなり、孟子いはずや浩然の氣を養ふと、此氣養はずんばあるべからず、

一事の上には理と勢との二つ必らずあるべし、歷史の上にては能く見分つべけれども、實事にかゝりては甚だ見分けがたし、理勢は離れざるものなれば能く〳〵心を用ゆべし、譬へば賊ありて討つべき罪あるは其理あればなり、規模術略吾胸中に定りて、之を發するに千仞に坐して圓石に轉ずるが如く勇決なる處は勢といふべし、事に關かるものは理勢を知らずんばあるべからず、只勢のみを知て事を爲すものは、必らず術に陷るべし、又理ばかりを見て爲すものは、事に困む時節到來して、ゆき廻るべし、いづれ當理而進、審勢而後動ものにあらざれば、理勢を知るものといふべからず、

一、事の上にて機會と唱ふるもの二あり、僥倖の機會あり、又設け起す機會あり、大丈夫徒らに僥倖を頼まんや、大事に臨んでは是非機會は引き起さずんばあるべからず、豪傑の爲したる事を見るべし、設けたる機會も跡より見れば僥倖のやうに見ゆ、氣を付け味ふべし、

一、變事俄かに出來せる時、動搖せず從容として其變に應ずるものは、事の起らざる以前定まらずんばあるべからず、變起らば只それに應ずるのみなり、古人曰く、大丈夫胸中、洒々落々、如光風霽月、任其自然、何有一毫之動心哉、是れ即ち標的なり、如此體のもの變に逢ふて何ぞ動搖すべきものならんや、

南洲先生の訓は直截にして簡明なり。其の一點抹香臭なきの處、殊に其人物を見るに足れり。知らず滿天下讀書の子、此の遺訓を奉じて南洲が所謂仕末に困る底の人物となり得る者幾人かある。嗚乎如今果して南洲なきや否や、人々自己の鼻孔を捻じ看よ。

禪の人物鍛成 終

明治三十五年十一月廿四日印刷
明治三十五年十一月廿七日發行

著作權所有

發兌

著作者　早田玄洞

發行者　岩崎鐵次郎
東京市神田區鍛冶町十七番地

印刷者　置市二
東京市神田區錦町三丁目一番地

印刷所　小川印刷所
東京市神田區錦町三丁目一番地

發兌　大學館
東京市神田區鍛冶町十七番地
電話本局三〇六七番

○諢の人物鍛成
正價金弐拾五錢

村上濁浪君著
冒險旅行術
正價廿五錢　郵稅四錢
生を賭し、**死**を決し高岳に溪谷に深林に沙漠に七寸の草鞋を踏破して奇勝を探り、險難を冒す、**勇氣凛然**、剛膽烈々、日本男兒の好んで爲すべき處なり。本書は**世界各國に於ける**冒險者が熱帶寒帶、北極南極、瘴烟毒霧の地、**猛獸怪鳥**の巷を跋渉したる記事を網羅し、且つその**準備方法**必須の條件を明細に詳悉せり。

鐵脚子著　岡落葉君畫
野宿旅行
正價廿五錢　郵稅四錢
三個の風流漢あり、**菅笠に蕉一枚**脚絆に草鞋の扮裝、先づ行人を驚し、漂々乎として東都を出て汽車の便を藉らず、嚢中の空乏元より覺悟する所**青天井に草枕**、胴羅盤張り上けて蚊軍を退却せしめ、**一瓶の正宗に**天地を呑んで、中山道を、野宿して旅の耻は掻捨ての**奇談珍話**抱腹絶倒すべき滑稽失策のいろ〳〵正に**消夏の好伴侶**なり！
（前付の一）

木村鷹太郎君著

肖像寫眞數葉入

バイロン 文界之大魔王

正價四十錢　郵税四錢

目次大要

第一編　英國に於ける詩人バイロン
バイロンの遺傳及其幼時
ケンブリッチに於けるバイロン
「バイルドハロルド」の旅行
結婚、離婚、婦人の關係、英國訣別

第二編　外國に於けるバイロン
瑞西及ヱチチアに於けるバイロン
ラヱンナに於けるバイロン
ヒサ及セノアに於けるバイロン

第三編　バイロンの思想、文學、哲學
天地觀及自我論
不平及厭世
人道と耶蘇教との衝突
快樂主義
女性及愛戀觀
道德觀
海賊及びサタン主義

第四編　英雄バイロン
イタリヤの秘密政黨及グレンヤの獨立戰爭
バイロンの死

平野紫陽君著　岡落葉君

文學奇瑞譚

正價廿五錢　郵税四錢

目次大要

第一編　雨を祈り又雨を止めたる事
第二編　疾病を癒せし事
第三編　禽獸を感せしめし事
第四編　神人唱和
第五編　神人を感動せしめし事
第六編　不吉を變して人の心を安からしめし事
第七編　罪禍を脱れ又罪禍を招きし事
第八編　人に侮られず且つ品位を高めし事
第九編　望を達する事
第十編　名號を得たる事
第十一編　恩賜に預る事
第十二編　位階を得たる事
第十三編　他人の詩歌を應用する事

墨堤隱士著　肖像寫眞版入

大臣の書生時代

正價三十錢　郵税四錢

大禮服に勳章を帶びたる現在はいざ知らず短褐弊衣の腕白時代には、奇々妙々の珍談山の如く流石に未來の宰相だけあつて、滑稽の中に學ふべき處あり、亂暴の中に、膽氣愛すべき處あり、啻にこの逸話を讀めば趣味の湧然たるを覺ゆるのみならず、立志の覺悟には無比の興奮たる好個の讀物なり！

墨堤隱士著　肖像寫眞版入

日本富豪の家憲

正價三十錢　郵税四錢

目次

三井家の家憲
本間家の家憲
松屋呉服店の家憲
岩崎家の家憲
大丸の家憲
住友家の家憲
中澤家の家憲
安田家の家憲
山本家の家憲
澁澤家の家憲
升本家の家憲
白木屋呉服店の家憲
鴻池家の家憲
菊池家の家憲

原田東風君著　岡落葉君畫

奇談 貧乏旅行

正價二十五錢　郵稅四錢

貧乏旅行は即ち貧乏人の旅行、已に貧乏人なり、嚢中は乏し、空乏なる嚢中を以て**長途の旅行**を試むる、**野宿**は勿論の事なり、**飢餓**は覺悟の前なり、愈々**進めば**愈々**究し**愈々究して此に**智慧**生じ、**勇**生じ、此に於てか、**失策**となり、**意外**の**歡迎**となり奇談百出一**讀妙味**云ふ可からず、

（前付の四）

村上濁浪君編　寫眞版數葉入

世界第一譚

正價二十五錢　郵稅四錢

目次大要

世界第一瀑布の探險
世界三大不思議
世界第一金剛石の來歷
長壽者躰
世界第一英雄、シーザー
古今大物盡
奈良大佛世界漫遊記
萬國珍物博覽會
世界第一義士墓と遺物
赤穗義士の逸話
世界一の力持と髯男
世界第一烈女シャンダーク
世界名物膝栗毛
世界第一の名劍
人類學上の世界第一

（前付の五）

木村鷹太郎君著

孔子 孟子 荀子 人物養成譯

價參格錢　郵稅四錢

◎學生机上の良書！

孔子、孟子、荀子の**傳記**、主義、**理想**、訓言、**著書**、弟子養成の手腕悉く敘說評論す、

性善說、**性惡說**、孟荀兩家が根本より見解を別にして、各沿々數萬言となる其間の**活動面目**は蓋し一讀せざる可からざるの點

◎教師心携の寶典！

墨堤隱士著

博士苦學談

價二十五錢

徒らに陳腐の**倫理道德**に依つて情熱炎々たる青年を馴致せんとす迂愚も亦甚しかな

敢て本書を出版して、文學、法學、工學、醫學、農學、理學、林學の諸博士數十人が**青年時代の苦學談**を青年諸氏に示すもの豈他あらんや、

向上の精神に富み希望の光を望み**成效に餘念**なき青年諸氏は本書を讀んで益々三省發奮せずんば已まざらん。

早田玄洞君著　岡落葉君畫

錬膽夜間遠足

價貳拾錢　郵税四錢

夜間遠足の利益左の如し！

一夜間の旅行は最も費用を節的し得
一夜間の旅行は避暑の目的に適合す
三夜間の旅行は心膽修錬に益あり、

夜間遠足か如何に奇談珍話に富むか左の目次の概畧を一覽せよ！

●怪しの女　●犬の襲撃
●泥棒々々　●乞食問答
●英雄の跡　●夜の富士
●犯罪の嫌疑　●暗闘
●拘留　●無一物
●掏摸捕縛　●圖らぬ馳走

河村北溟君著

深山參籠　仙術修行奇談

價廿五錢　郵税二錢

深山の絶頂に登て天界の諸星の機密を探り、幽谷に下つて、狐狸と談じ深林に入つて、山猿と戯れ、果實を食ひ清泉を掬し、樹下石上に座禪の工夫を凝し、頭髪髦々として、五躰鶴の如く疲せ、始めて神通自在妙不可思儀の術を得たりと稱す、僞か眞か試みに一讀して、仙術の妙を探究せよ

柴田流星君著　岡落葉君畫

海之冒險奇談

價廿五錢　郵税四錢

英國の少年は好で冒險小說を讀む而もその重なるは海に關するものなり、英吉利本國の人士が四六時中太陽を見ざるなしと誇るに到る、本書は日本男兒が成せる海之事業を叮嚀に、親切に、正直に述べたるもの、金華山沖に暴風と戰ひ、占守島に郡司大尉と談じ露領コマンドルヌキー島に萬歳を唱ふるまで痛快壯絶、海國男兒の好伴侶！

森脇星江君著

禪學無一物修行

價二十錢　郵税四錢

禪學の奥儀は深遠にして容易に解す可からず。恰も深山に登るが如き乎、羊腸たる險路幾千條彷徨躊躇して落日黄昏よく迷はざるものなし本書は、家を捨て、妻子を捨て、俗念を絶ち、塵慾を厭離し日夜、無の意義を悟らんとしたる多年の修行を、自叙體に記したるもの、唯に禪學に志すものゝみならず、苟くも事業學問に志すものゝ爲めに無比の鉄鞭なり、膽力養成には無比の珍書なり！

池田錦水君著

境遇各面 **戀の解剖**

價二十錢　郵稅四錢

戀愛の **眞理を解剖** するものは本書なり、**精神的戀愛** と **肉躰的戀愛** とを對照して痛論するものは本書なり。

●初戀●見ぬ戀●片戀●忍ぶ戀●道ならぬ戀●言はぬ戀●虛僞の戀●誠實の戀●浮氣の戀●戀のつらさ●戀の悲しさ●戀のうれしさ

以上はその大項にして、娓々として述ぶる所、數千言寔に **小說家机上の珍書！**

桐友散士著　岡落葉君畫

社會の裏面 暗夜 第二篇 奇觀 **夜の女界**

價廿五錢　郵稅四錢

夜の女界の說明する奇談は何ぞ **社會の百方面** に渉りて人生の **暗黑を暴露** し **秘密を解剖** す、目次中の奇拔 **人を驚** ろかすべき數項を擧ぐれば

●遊廊とは何ぞや●遊廊の深夜●淺草の銘酒店●密航婦●遊女の運命●女役者の裏面●女義太夫の生活●黃昏の藝妓屋●權妻の生活●待合の秘密●妾奉公周旋●料理屋の酌婦

（前付の八）

押川春浪君著　岡落葉君畫

世界怪奇譚

全部六卷　正價各廿五錢　郵稅四錢

第一編 **奇人の旅行** 三版	第二編 **世界武者修行**	第三編 **空中大飛行艇**	第四編 **怪人奇談**	第五編 **魔島の奇跡**
第六編 **續空中大飛行艇**				

二十世紀の腰票毛は世界が舞臺て御座る奇人あり、其族從百廿萬非米國に纖山王と稱し大平洋に露露西亞を凹ましの英國交際場裡に傍若無人の奇劇を演ずる美人は龍る高襟は魂消え讀者亦一讀三嘆奇想天外より落ちて快絶天馬の如きとは春洹君の著書を評して適切なり此の篇節を分ち二十四回頭の美人蹴浴事件早く發者の贈を客ふ主人公園金藤次が如意棒を提げて世界大陸下横行飛躍或は任俠或は變勇碧眼豚尾の贈玉を挫いて痛快壯絶未曾有の新發明空中大飛行艇は日本の理學士と獨逸の博士の手に依つて成り、博士はこれを惡用して美人天空に飛ふの惨事を惹起し巴里市全市の大問題となる理學士が義俠なる同志と共に捜索に向ふ壯快雷霆を驚し痛恨天地呼ふ本篇の梗概は一妖婆が呪文の爲めに眉目清秀の一青年が其姿を醜惡なる友人も姿と變せられて煩悶苦痛する事幾旬再び元の樣に回へるも不思議なる話なり、奇俠士は勇壯にして戰場の花よ、悲壯に共に嬌女童幼の愛誦措かざるべきもの

航海王の大寶庫船乘伯爵の初航海寶人島の俘人間生垣の法墓の底の殺人地球の極の寶山地底の矣少年白髮の老人と九人の黑奴逃亡しの寶行片目と世界第一富豪羊に化けた人間美人城の驚跡燕舞空中電氣の作用三十二の金門人魚と幽靈の目業航海王の驚國附錄に盛寓の三人晩夜の白刀み添ふ

美人捜索に向ひたる空中大飛行艇の面々は靈烟霞幾度か苦み猛獸變人の爲め屢々厄に逢ひ遂に笑人を取戻し惡漢士武柄を詠み氣揚々と巴里全市の大歡迎に局を結ぶ附錄として蘆薇環の行衛に就いての賭君よりの答案を附したれば更に深きもの味のある可し

豪傑叢談

洋裝 美本

全部拾冊

正價一冊金貳拾五錢郵稅四錢

編號	書名	著者	版本
第壹編	多情の豪傑	宮崎來城君著	第八版
第貳編	豪傑の臨終	宮崎來城君著	第六版
第參編	豪傑の少時	宮崎來城君著	第四版
第四編	豪傑の遺訓	岩井松風軒著	第三版
第五編	豪傑の雅量	宮崎來城君著	第貳版

目次左の如し

○源頼朝○源義經○平重衡○木曾義仲○曾我祐成○楠正行○藤原藤房○高師直○尊良親王○高師秋○新田義貞○新田義興○平通盛○柴田勝家○平維盛○豐臣秀吉

豪傑の氣象は臨終の間に於てこれを見る、來城子獨擅の健筆を振つて無數の古豪傑が臨終を描く一讀懦夫も起つ可く鬼神も泣くべし

蛇は三寸にして人を呑むの慨あり、豪傑の豪傑たるはそれ天品に依るか又聞く大器晩成の語あり豪傑の豪傑たるはそれ鍛練に依るかこれを知らんと欲せば須らく豪傑が少年時代の言語擧止に徵せよ

創業は易し守成は難し、英雄の苦心はその子孫の業に在り、遺訓を遵守するもの以て榮へ背戻するもの衰ふるは歴史に徵して明なり、有爲の青年なるもの一冊を座右に置いて朝々の鑑とすべし

諸豪傑が亂世に於ける慣用手段たる權謀術數以外に一種の天眞潤達なる襟度を以て人を迎へたる絶好の逸話、玆に例の健筆を以て寫し出されたるもの一讀光風霽月の想あらん

豪傑叢談

洋裝 美本

全部拾冊

正價一冊金貳拾五錢郵稅四錢

編號	書名	著者	版本
第六編	豪傑の交際	西山筑濱君著	
第七編	豪傑の信仰	岩井松風軒著	
第八編	豪傑の修養	西山筑濱君著	
第九編	續多情の豪傑	宮崎來城君著	
第拾編	豪傑と奥方	西山筑濱君著	

交際は即ち處世法なり交際に拙なる者は世に遲るゝは自然の數なり、異色異種の人物交々來り接す此間に處して如何に談話し如何に待遇すべきや豪傑が苦心また甚だしきものあり此書これを觀いて些の餘蘊を見す

英雄豪傑の壯業偉蹟は實に渠れが信仰の産物なり、神か、佛か、人か、物か、道か、理か、物か渠等は其の一の或ものを崇拜し以て志を成したるものなり本書詳に之を謂ふ

大事業の下には大なる準備あり偉人の素には大なる修養あり修養は活動の第一義なるの語を知る者須らく此書に就て如何に英雄豪傑がその素養に力むるに困苦勉勵せしかを見よ

曩に、多情の豪傑一篇を著して滿天下の耳目を驚倒したる著者更に其洩れたる戰國の勇將猛士が情事に寫す瑰奇優艷の筆致は說くを用ゐず讀む者恍惚として自失せずんば幸のみ

豪傑を知らんとするには先づ夫人の研究を要す、女子か男子に及ぼす勢力等大なるものあればなり、此書或は叙說し或は評論し俊髦と佳人双々點綴する處一部小說を讀むの感あり

學生座右叢書

第一編	第二編	第三編	第四編	第五編
駿台隱士著	涵養社編	駿台隱士著	駿台隱士著	駿台隱士著
最近記臆法	新式勉學要訣	學生讀書法	處世交際術	雄辯談話法
郵稅四錢	郵稅四錢	郵稅四錢	郵稅四錢	郵稅四錢
價二十錢	價廿五錢	價二十錢	價二十錢	價二十錢

記臆法の必要、記臆法の用語、記臆法の種類、自然的記臆法、人爲的記臆法、記臆法の應用、附錄(本書の秘傳物見知の秘傳以上は其の大項なり小節に分ち事數十又字平易と實用を旨とす)

理科研究法●外國語研究法●數學研究法●國文研究法●歷史研究法●地理研究法●和漢字典の調べ方●講演者丸山陸軍教授中澤陸軍教授深井學校長文學博士大槻文彦等現代知名大家

讀書の利益讀書の快樂讀書の法則讀書法理解力思考力記臆力書籍の選擇と標準その法則讀書の時と場所と心身の狀態と季節と時間と記臆法記臆法抄錄法記入法圖解法多讀速讀飛讀固執等の弊害讀疑問讀方讀取等附錄讀書格言

名望財産地位等を得るには當に才智學問の力のみに非ず交際を闕却せんには已に得べき資格あつてこれを失ふ事あり交際の必要なること斯の如し然れとも亦交際の法その宜ろしきを得ずんばかへつてその害をなす事あり交際の如しくすべからざる事斯の如し本書丁寧反覆世の交際を說いて餘蘊なし

社會の裏面

正價廿五錢　郵稅四錢

第一編 乞食

原田東風君著岡落葉君畫

人生觀●乞食の種類●東京の乞食●境遇及性質●墮落の結果と先天的乞食と乞食の巢窟●乞食の生活●慾望と快樂●階級と勢力●乞食の交際●乞食の婚姻●乞食の末路●乞食の教育●乞食の罪惡●社會と乞食●乞食の談話

第二編 女義太夫の裏面

葛城天華君著岡落葉君畫

(女義太夫寫眞入)

惡魔として女義太夫●妻面より見たる女義太夫●常指迎の關係大阪の女義太夫の自宅●樂屋の裏面女義太夫の總揚と比較の寄進客と收入對席亭と五堂師匠●弟子の關係●其の自宅女義太夫と其他の女藝人●女義太夫の大參悲劇的末路●最近の女義太夫一覽表●女義太夫一覽表語物語等

第三編 夜の女界

桐友散士著岡落葉君畫

遊廓とは何ぞや●酌婦屋揚弓店●娼者屋●遊廓の深夜園者の生活●女郎の生活●女藝人の生活●女藝太夫の生活●藝妓の生活●藝妓の種類の新造●料理店の女中●待合の狀態●密航婦●觀察●公娼●旋女●房の業務等●十數篇●觀察奇譽一讀殆ど

第四編 貧民窟

原田東風君著岡落葉君畫

勞働問題●社會風俗●宗教等●研究しつゝある人士は先づ第一に貧民窟の現狀に精通せざるべからず而して從來空論の喧々たる所以のものが研究を缺きしこれを概じ觀しくその境に入りて巨細の觀察せられたるもの本書なり

第五編 役者の裏面

葛城天華君著

役者の生活より技藝の批評社會風教上より見たる役者の地獄としての役者の樂屋●舞臺以外に於ける狀態より名優が技藝に就ての苦心談●到り新進俳優の女役者子供役者の一覽表●その逸話等一切漏す事なし

木村鷹太郎君著（色刷寫眞版肖像入）

バイロン 文界之大魔王

價四十錢　郵稅四錢

文學博士井上哲次郎君題　文學士元良勇次郎君序
希臘人キセノフォーン著　木村鷹太郎君譯

ソクラテース 人物養成譚

第五版　價四拾錢　郵稅六錢

木村鷹太郎君著

孔子 孟子 荀子 人物養成譚

價三十錢　郵稅四錢

竹內楠三君著

耶蘇人物養成譚

價三十錢　郵稅四錢

木村鷹太郎君著

王陽明人物養成譚

價三十錢　郵稅四錢

本書はバイロン卿が幼時よりその希臘戰爭に身を投じて死したる迄の生涯を逐次精細に叙し、その性格その思想、その戀愛その文學その逸話迄一も漏す所なく悉く叙說し悉く評隲して眼光炬の如く筆勢火の如く狂熱の詩人が面目活躍して吾人が面前に髣髴たらんと欲す、實に寂莫たる文壇に一道の活氣を與へたりと云ふ可し、

◎本書は「クランクリン」無二の愛讀書なり◎本書は聖哲「ソクラテース」が單身市井を徘徊し快妙の方法により各種各異幾多の人物を養成したる奇絶の事業談なり◎本書は「ソクラテース」の性行、經歷、逸事は殘らず網羅せり◎本書は西洋論語として其名高く歐米諸國敎育家が必ず一本を携帶せざるなしと云ふ、

孔子が春秋を著して正邪を明にしたる大學論語に從てその主義を說き儒敎の根本に開きたる孟子の孟子數篇著はし義を重じて利を却けたる孔子の遺志を嗣ぎて性善說を唱へたる荀子の背子性惡說を唱へたる、各々其大と其想を異にしたる從て人物の弟子を養成する道に特點あり、今之を評隲し論識して儒家の面目を明にせるもの本書を以て嚆矢とす、

バイブル一冊如何に偉大の感化を世界に遺したるや歐洲全國は云ふに及ばず延ひては南洋東洋諸國に到るまてその勢力を伸張して天下殆んど耶蘇教國たらんとす基督の力亦偉なる哉基督が其の弟子を養成するに如何なる道を以てしたるか俗人凡衆を感化するに如何なる道を以てせるやバイブルを基として延ひて歷史上よりこれを餘蘊なく說明せるものは本書なり、

明の王陽明が唱導したる此學派は陳腐々たる死學者と痛罵し倫に法學間に依つて世人を導き悟さんとすその敎義を受けたるもの支那其人多し我朝にても中江藤樹熊澤蕃山あり大鹽中齋あり明治に到つては愈々この學派を汲みその學義を研究するもの多く陽明學は正に一勢力となれり木村君例の明快痛切の筆を以て王陽明が人物養成を評說し論議したるもの本書なり、

長田偶得君著　岡落葉君畫

逸事奇談 明治六十大臣

第參版　價三十錢　郵稅四錢

墨堤隱士著（肖像寫眞入）

大臣の書生時代

價三十錢　郵稅四錢

墨堤隱士著（肖像寫眞入）

日本富豪の家憲

價三十錢　郵稅四錢

墨堤隱士著　岡落葉君畫

明治富豪致富時代

價廿五錢　郵稅四錢

岩崎徂堂君著　（再版）

明治豪商苦心談

價二十錢　郵稅四錢

明治十八年內閣制度改正以來、大臣の重職に上れる俊英併せて六十人、世にその功德を頌し美績を揚ぐれるもの其類多し、本書はこれとその選を異にしその衣冠を去り大禮服を脫ぎたる赤裸々たる面目を寫し出せり、一たび讀せば其の逸事の意外に驚き、奇話の突飛なるに驚く可し、

伊藤巳代治陸奧宗光後藤象二郎加藤高明渡邊國武桂太郎芳川顯正菊池大麓副島種臣品川彌二郎兒玉源太郎大隈重信末松謙澄山田顯義尾崎行雄淸浦奎吾松方正義原敬西鄉從道板垣退助谷干城伊藤博文西園寺公望井上毅黑田淸隆山本權兵衞外山正一青木周藏森有禮犬養毅野村靖土方久元井上馨小林壽太郎大山巖星亨の三十六人がその大臣の榮位を占めざる以前即ち維新の志士時代の逸話珍談の最も興趣あるものを集む一讀青年子弟の志望を警起せしむ、

三井家の家憲、松屋吳服店の家憲、大丸の家憲、中濟家の家憲、山本家の家憲、升本家の家憲、鴻池家の家憲、本間家の家憲、山崎家の家憲、住友家の家憲、安田家の家憲、澁澤家の家憲、白木屋吳服店の家憲、菊池家の家憲、此商人が家憲は如何に嚴正にして緻密なるやぞ、一讀してその創業守成の眞精神を發れ、

三井鴻池住友安田澁澤淺野高島大谷岩谷古河濱野竹井大倉若尾小野中澤八尾今村高瀨小林田中升本高木西村玉置江崎小田松本大江三輪下鄕原太田小本田山本守田三野村佐々木澤田横山前田雨宮數十人が巨萬の財産家となる奇運と所以を詳說す附錄には五十萬圓以上の資產家名譽を添ふ、

虛手巨萬の富を作り、空拳經濟界の覇權を握りつゝある豪商大賈が今日幸榮の地位を致したる苦心はそれ如何、富を羨み名を欲するの人は須く先づ此書に就て悟る所あるべし、

涵養社編纂

現代大家 青年の憲法

再版

價廿錢
郵稅四錢

現代大家杉浦重剛、井上哲次郎、三宅雄二郎、嘉納治五郎、加藤弘之、大隈重信、島田三郎、志賀重昂、大槻文彦、陸實、松井介石、横井時雄氏等が青年の爲めに説き諭せられたる頗る有益なる談を蒐集したるものなり、

東台隱士著

名士の交際術

價廿三錢
郵稅四錢

本書に活躍せる人物左の如し、如何に應接し如何に談話するかこれを一々訪問して活寫せるもの、他の揣摩の記事と雲泥の差あり、大養木堂、伊達男爵、田口卯吉、田中正造、大隈伯爵、高木博士、江木衷博士、平岡浩太郎、頭山滿、小山米峰、久保田讓、高橋博士、佐藤少將、飯田舊醫士、北垣國道、古賀廉造等十數人

岩崎徂堂君著　肖像寫眞版入

名士の兄弟

價廿錢
郵稅四錢

本書敍する處現今知人の士が兄弟相並んで世に推稱せらる所以と小傳となり、江木兄弟、有賀兄弟、櫻井兄弟、幸田兄弟、一木兄弟、益田兄弟、伊東兄弟、岡松兄弟、菊池兄弟、波邊兄弟、中澤兄弟、若尾兄弟、高梨兄弟、鐵川兄弟、井上兄弟、德川兄弟、四圓寺兄弟、坪井兄弟、等

岩崎徂堂君著　◎

人物と長所

價廿五錢
郵稅四錢

此書に掲ぐる人物は皆是れ現時社會に活動せる活人物にして其長所を摘く極めて警抜適切其間滑稽あり、奇智あり、血あり、涙あり、百名士が百長所は彩霞白鷗の間に點綴して天地の壯觀を呈す、

須藤鷲山君著　岡落葉君畫

名士名家の夫人

價廿五錢
郵稅四錢

古今東西名を擧げ産を興すの人士がその夫人の内助扶掖に依るもの頗る多し、世に名士名家の傳記逸話の行はるゝや久し、獨り夫人に關するもの無かるべけんや本書叙筆平易にして項目頗る饒多、賢母良妻たらんとする人士須らく一讀を要す、

岩崎徂堂君著　岡落葉君畫（肖像筆蹟入）

中江兆民奇行談

價廿五錢
郵稅四錢

中江兆民居士は明治の梟雄たる多士の中一頭地を抜くの傑物であると共に亦一世の奇男兒である、その意表に出で言ふ所擧ぐる所人を驚かす、本書その奇行を蒐めて洽く餘す所なし、經世の志あるもの以て一讀せざる可からず、

岩崎徂堂君著　岡落葉君畫（肖像筆蹟入）

田中正造奇行談

價廿五錢
郵稅四錢

明治の佐倉宗五郎とは誰ぞ鑛毒問題の爲めに一身を犧牲に供して狂奔七つ、ある田中正造翁其人なり翁は寔に明治の奇人にして而も稀に見る無血男兒なり、翁が行動はこの澆季頽廢社會を興奮覺醒するに足るもの有り、今の一生涯の逸事奇談を編んで世人に紹介するを以所覺に他あらんや、

墨堤隱士著　岡落葉君畫

明治人物の少壯時代

價廿五錢
郵稅四錢

本書は後進の少年子弟が素志涵養の目的に依つて著はされたるもの現今の俊秀豪傑數十人の少壯時代を描きその教育その天稟その困苦勉勵その忍耐その鬼氣その奮發如何に常人とその趣を異にせるや如何に凡俗とその心を同うせざるや一讀奮起の好證本たるを期す、

墨堤隱士著　（肖像寫眞入）

日本博士苦學談

價廿五錢
郵稅四錢

明治の鴻儒となり、百世の師表となつて、我が學術界に一代の光輝を添へたる博士が少年時代より現今の境遇に到るその苦學の事實を一讀せば、その常一樣ならざるその才智の非凡大膽の意想外なるその見識の人を驚かすに足るもの有り、その一は以て人を奬勵せしむるの材となり、その一は以て閑暇の話柄となり、冥々裡に無比の教訓を與へしめんとして著はされたるは本書なり、

墨堤隱士著

日本博士奇行談

價廿五錢
郵稅四錢

池田錦水君著　岡落葉君畫

戀の一年有半

再版　價廿五錢　郵税四錢

戀愛は青年の花なり、戀愛を一概に排斥する者は未だ以て人世を語る可からず、戀愛は人生の慰籍なり花爲めに香あり月爲めに光あり一度風吹き雲起らん乎戀愛は人生の悲劇なり、一年有半に於ける多趣多樣の戀愛を覺らんと欲せば本書これを容易に說明す、

池田錦水君著　小山榮達君畫

婦人と戀愛

三版　價廿錢　郵税四錢

婦人の通有性人生と戀戀の發動一時的戀愛虛誇的戀愛眞實的戀愛令夫人の戀細君の戀內儀の戀後家の戀外妾の戀令孃の戀女學生の戀町娘の戀下婢の戀藝妓の戀娼妓の戀都會と田舍婦人戀愛概說、

池田錦水君著　小山榮達君畫

奧樣と孃樣

價廿五錢　郵税四錢

奧樣とは如何經歷技能理想品性嗜好娛樂滑稽言語動作家務社交奧樣に寄す孃樣とは如何世間的智學藝術的智識希望嗜好遊戲擧止言語交際將來孃樣に寄す、

池田錦水君著

社會各面 女心の解剖

再版　價參拾錢　郵税四錢

(容貌)美人、十人並、醜婦(年配)老婆、年增、新造、少女、(風土)關西婦人、關東婦人、海邊婦人、山國婦人、都會婦人、田園婦人(職業)女教師、女藝師匠、歌舞音曲師匠、看護婦、產婆、女髮結、女按摩、傳母、下女、工女、外妾、洋妾女役者、娘義太夫、見世物藝人、藝妓、娼妓、鴇母、酌婦、賣淫婦(妻女)令婦人、妻君、內儀、女將、嫁(處女)女學生、町娘、阿寬(世外婦人)後家、尼、緖言と結論(婦人一貫の心情)、

池田錦水君著　岡落葉君畫

無錢修學

價廿五錢　郵税四錢

本書の目的は青年が苦學力行を奬勵するに在り、因循姑息の念を除去するに在り、獨立自活の法を敎ふるに在り、目次を分つ事第二十新聞配達となり、立坊となり、夜家投となり、托鉢坊主となり、車夫となり、種々苦心困難の境遇を小說的に描き出す、附錄として、別に學生自活法を添へたり、

原田東風君著　岡落葉君畫

暗黑の青年時代

價廿五錢　郵税四錢

余が郷、余が家の歷史、境遇及び幼時、亂暴時代、自活、墮落、出奔、苦學、學校時代、上京、第二の若學、官吏、失敗、落膽、郷里の歸還、新聞社生活、第二の上京●前途に光明を認め一道の活路を求めんとする青年は本書を讀んで準備警戒せざる可からず、

井上啞々君著　岡落葉君畫

遊學書生

價廿五錢　郵税四錢

本書は無邪氣無垢の青年が東都に遊學して周圍の惡風に依り誘惑に染み！不識不知墮落する傾向を小說的寫實的に描きたるもの以て新當世書生氣質と稱す可きものなり、著者得意の皮肉文字は如何に讀者をして印象深からしむるや乞ふ精讀して文字以外の趣味を發見され、

原田東風君著　小山榮達君畫

木賃宿

再版　價廿五錢　郵税四錢

社會の暗面を知らんと欲せば先づ下層の生活を研究すべし、下層の生活を探らんと欲せば其の最も適切にして複雜なる木賃宿を觀察するを便とす木賃宿の活寫よく社會の罪惡亂調病源を指摘して餘すなからんとす而も此事容易に非す著者苦心慘澹此著あり

蛟龍子編

男女 東京學校案內

價廿五錢　郵税四錢

東都に遊學する青年男女の爲め東都百三十餘校の所在地、入學規則、修業年限、卒業後の資格、試驗期日課目費用等凡て最近の調査に依りて編成したるもの記事は精密にして正確なるは、編者の責任を帶ぶる所なり

矢野滄浪君著　岡落葉君畫

食客

再版　價廿錢　郵税四錢

本書は著者が實踐せし事柄を言文一致を以て描かれたるものにして食客が辛酸困苦の境遇不平憤懣の生活讀むものをして身その中に在るの感を起さしむ寔に近時片々たる駄小說に比して趣味優ること數番なるのみならず苦學の書生に慰藉を與ふること甚だ多し、

早田攻洞君著　肖像入

李鴻章

價廿錢
郵稅四錢

東洋の風雲は二巨人の手に依て變幻出沒の態あり、この一巨人きこれ淸翁比公と相並んで世界の三大傑と稱せらるゝに當り一の能く遠く所以なり、而して彼れが少年時代より英雄を悼惜するの道あらんや、本書は彼れが其の蹉跌に到るの迄の行動を叙し、逸話奇聞悉く輯めて淸す所なく、又以て東洋史の一部を補ふに足る。

森脇星江君著

禪學無一物修行

價廿五錢
郵稅四錢

禪學の奥義は深遠にして容易に解すべからず、恰も山に登るが如し、半腹なる險路幾千條、就れが正か否かを解するに苦しみ彷徨躑躅して、落日黃昏よく迷はざるものなし、本書は妻子を捨て家を棄て俗念を絶ち塵慾を厭離し、日夜無の惡戰を悟らんとしたる多年の修行を自叙證に記したるもの唯に禪學に志すものゝみならず苟しくも那邊に好個の人間に志すものゝ爲めには無比の鉄鞭なり、

早田攻洞君著　岡落葉君畵

膽力修行

價廿五錢
郵稅四錢

膽力養成には好個本なり、曰く、古寺、曰く人魂、曰く化地藏、曰く古刑場、曰く曠夜の怪談、曰く丑の刻、曰く古城の樓、曰く廢谷の一夜、曰く食人怪、曰く死人の一番、曰く寄面鬼、項目の奇々怪々一讀して粟肌に生ずる思あり、記事頗る荒誕にして坐臥工夫を缺せたり、

平野紫陽君著　岡落葉君著

文學奇瑞譚

價廿五錢
郵稅四錢

本書は古來歷史上に於ける和歌俳句等が人情を和らげ鬼神を泣かしめ妖怪を退治したる奇跡の逸話を集めたるもの就中に消閑の具には無比の好著たるのみならず、また得易からざる參考書なり、

與謝野鐵幹君著

新派和歌大要

價廿五錢
郵稅四錢

與附野鐵幹君が初學者の爲めに多年戰話評論註釋せられたる凡て新派和歌に關する述作を攻めたるもの就中新詩評釋新詩集の如きは歌壇の珍、他に見る可からざるものなり新派和歌に志す士は是非一本を贈うて可なり、

生田葵山人著　アートペーパー美術書挿入

貴族の戀

價廿八錢
郵稅四錢

貴族の戀の一篇は新作家中拔群の譽ある生田葵山人が近時の傑作なり、痴男痴女の體は已に殆ど斜に於ける描寫に於ては上流貴族社會に於ける戀愛に向つて、細心周密なる筆を振ひたるもの如き、令孃が功名に飢えたるを見ず妙齡にして顏玉の如き令孃が功名に飢えたる紳士と戀愛に饑ける紳士とを纖手に飜弄する蓋し本編中の骨子なりとす、

巖谷漣山人序　生田葵山人著

少英雄

再版
價廿五錢
郵稅四錢

葵山人が少年小說に巧手なるは、今更喋々を要せざる處、少年士官、踏靴亞米利加行、黃金の犬、踏切の番人、狐の踊、母の戒鞭、海軍の少年の數篇を輯むる、

巖谷漣山人序　生田葵山人著

進擊隊

再版
價廿五錢
郵稅四錢

海賊の逆擊、支那の少年、蝶の御墓、火中の義術、笛吹娘、めなこれ少年少女諸君の愛誦措ざるべきも、無邪氣の中に教訓あり、天眞爛漫なる中に萬夫も動かすべからざる勇氣あり、趣味洋々として家庭教育には必須の良書なり、

押川浪春君著　寫眞版插入

航海奇譚

再版
正價廿五錢
郵稅四錢

大洋と言ふ已に快也、航海と言ふ已に壯也、奇譚といふに至つては讀まざる能はず、太平洋を馳る船、太四洋に沈む船、甲板に起りたる神鬼出沒の活劇、奇絶にして趣味多く快絶にして惡興盡たし、

巢田流星君著　寫眞版插入

海之冒險

價廿五錢
郵稅四錢

目次一海上の怪、孤島の奇遇、幽靈島、海の奇嬉人、海軍士官無名の碑、俠血勇兒二人胡弓師、英國の少年は好て冒險小說を讀むも而もその重なるは海に關するものなり英吉利本國の人々が四六時中日本を見なせるも誇るに至る亦宜哉海の冒險は漸の日本人が金華山沖に暴風と戰ひ占守島に漂到し直に逃へ切に直正に郵司大尉と談じ露頭露面の日本人ペルヌキ島に萬感を唱ふるが如き何如の快事ぞ海國の男兒は徹なき海に死せざる也、

村上濁浪君編　寫眞版數葉入

海陸軍談

價廿五錢　郵稅四錢

村上濁浪君編　寫眞版數葉入

野蠻島

價廿錢　郵稅四錢

村上濁浪君編　寫眞版數葉入

日本男兒

價廿錢　郵稅四錢

村上濁浪君編　寫眞版數葉入

海陸大探險

價廿錢　郵稅四錢

村上濁浪君編　寫眞版數葉入

世界第一譚

價廿五錢　郵稅四錢

山地獨眼龍將軍の幼時、黃海大海戰前の感覺、最近の遊泳會、戰爭の話、台灣蠻人の戰鬪準備、白虎隊士自刃、彰義隊の奮鬪、虎征伐、陸平演習の話、虎義少尉の天津城攻撃談、江田島兵學校生活、英國海軍小學校、谷將軍熊本籠城談、四郷南洲の最期、海兵團の組織、海兵團水兵生活、東洋現在各國海軍力比較等、

布哇蠻人の噴火口祭、蕨人の部落、亞佛利加の舞踏蝦蛃人の唄、八丈島の方言、亞非利加蠻人の大猿狩、琉球の葬風俗、朝鮮の奇風俗、奴隷物語、亞非利加蠻地紀行、蝦夷島の熊狩の話、馬來半島の奇俗、南洋の食人種、千島土産、野蠻人の狀態、日露戰爭ポンヲ島の蠻俗、踏國の蠻風、ゴリド族生活の話、蠻地の動植物、台灣島の住民等、

水戸屋敷の藤田東湖、激戰中の感覺、獄中の佐久間象山、萩野個園師の平生、新島襄氏立身傳、福島中佐の遠征、清中の山地將軍、伊藤政宗の壯圖、山田長政の一生、林子平の牛生遲、植物學者伊藤圭介翁、福澤翁の苦學、古今勇士認印元恭との對話、短刀少年、滑稽中の野中玉君、大寺少將の逸話、懺悔家逸話等、

世界第一過布の探險、世界三大不思議、金剛石の來歷、長壽者傳、世界第一英雄シーザル古今大人物、奈良大佛、世界漫遊記、英國珍物陳覽會、世界第一七萬圓と遺物、赤穗義士の逸話、世界第一烈婦ジャンヌ、ダルク、世界第一の力持と拳骨、世界名物勝負、毛世界第一、鈴談、歐米の世界第一、萬世界第一淑女、徐世寳人類學上の世界第一、世界第一系圖、世界第一高山比馬拉登攀記等、

新比子探險、澳太利大洞穴探險記、馬丹島漂流記、鯨骨鯨探險、天文觀測の探險、南極大陸探險記、紅頭嶼探險記、澁水水雷艇の傳記、百年前露都遊覽記、不死鳥探險記、大西洋橫斷記、亞佛利加森林彷徨記、虎坡外海戰の新聞、探險者心得、野中君登獄苦心談、土太島戰地探險、漆地蠻人の家庭、千島の生活等、

宮崎來城君著　岡落葉君筆寫眞版葉數入

無錢旅行

八版　價廿五錢　郵稅四錢

宮崎來城君著　岡落葉寫眞版數葉入

乞食旅行

五版　價廿五錢　郵稅四錢

鐵脚子著　岡落葉君畫

野宿旅行

價廿五錢　郵稅四錢

奇談　鐵脚子著　岡落葉君畫

貧乏旅行

價廿五錢　郵稅四錢

村上濁浪君著　岡落葉君畫

冒險旅行術

價廿五錢　郵稅四錢

旅行の面白味は汽車に在らず、汽船に在らず、駕に在らず、車に在らず、所謂徒歩無錢にして千山萬壑を跋渉するに在り風を愛ひ露を飲み乞食と合宿するなど辛苦の中に忘られぬ趣味の存するものあり、此書世に出でゝ數千部を賣り盡せり以て如何に壯快なる讀物なるを知れ、

旅行とは即ち貧乏人の旅行なり、已に貧乏人なり、已に乞食の仲間入して彼此と經廻くつた實歷談てあるから、三日したら止められぬといふ乞食の境遇はどんなものであらうか來城氏の無錢旅行を讀んだ人はその趣味の多い事を悟るであらう、

貧乏旅行は直ちに乞食の仲間入して彼此と經廻くつた實歷談てあるから、三日したら止められぬといふ乞食の境遇はどんなものであらうか來城氏の無錢旅行を讀んだ人はその趣味の多い事を悟るであらう、

冒險といふ生を暗して後の仕事なり死を決して後の所爲なり等常一樣の墅が企及し能はさる事に屬すされば冒險の趣味ある利益ある効力ある舉げて數ふべからす冒險旅行術は實に世界萬國に於ける大冒險の生涯を明記せり

文學士白河鯉洋君序　宮崎來城君著

楊貴妃

五版　價廿參錢　郵稅四錢

帝國大學敎授內藤耻叟先生序　黑河內與四郎君著

靜御前

四版　價參拾錢　郵稅四錢

文學博士三宅雪嶺先生序　岩井松風軒君著

小野小町

參版　價廿五錢　郵稅四錢

宮崎來城君著

國色史叢第壹編

虞美人

價廿五錢　郵稅四錢

宮崎來城君著

國色史叢第貳編

西施

價廿五錢　郵稅四錢

著者夙に漢文學に精通し清國に歷遊して人間未見の書に渉獵すること多年其現奇無双の筆を以て天下無双の國色を描く材料斬新にして艷麗の逸話頁錄して洞すなし一讀するもの身は二千年前に生れ面前貂妃か美貌に接し婀娜を耳にするの感あらん、

帝國大學國史科に於て、鎌倉時代國史を專攻せし著者が數十の奇書珍本を材料とし該博なる學識と流麗なる健筆に依りて靜御前が幼時より其最期に至る迄極めて正確に物せられたるも殊に其義經との關係の如きは最も詳細を極むる筋の坊間散逸社選の詳傳とは同一の跋に在らざるなり、

極美の女流として、非凡の歌仙としての小野小町が九十二年間の生涯の業枯盛衰を叙したるもの材料は正確文章は流麗暢逸、從來不可思議の裡に疑惑を留めし小町の事蹟は此書に依て始めて明晰に解決せられたり

楚の項羽か虞兮の歌を聽うて死別の血淚滂沱たりし事蹟は項羽本紀に一點の潤飾を與へたるもの、而も虞美人が群傳に到つては此を知るもの少し來城氏か此の艷筆果して如何の消息を描破し來るか、

國亡びて山河あり英雄の遺恨長へに滅ひす愛色の禍害それ大なる城來獨得の才筆は實に風霜を挾をみ句々血涙を含む

文學士辰巳小次郎序　岩井松風軒君著

淀君と太閤

四版　價廿八錢　郵稅四錢

本田種竹君序　長田偶得君著

維新豪傑の情事

三版　價廿五錢　郵稅四錢

渡邊修二郎君著

大久保利通の一生

再版　價參拾錢　郵稅四錢

文學士飯田吹萬君序　帝國大學俣野節村君著

偉人の言行

再版　價廿五錢　郵稅四錢

渡邊修二郎君著

青年と立身出世

再版　價貳拾錢　郵稅四錢

瀟洒剛行の徒妄りに英雄の皮相を學んで精神を解せず天下泪々として文弱優柔の弊に陷るを慨して此書あり、松軒子此に感に堪へざる所あり、先づ筆を英雄好色の論に起して萬丈の氣泡も淀君の色に溺れては如き英傑豐太閤の中に寡なきを吐き、紹代の興亡も淀君の一慘劇を叙するに盡せり、

醉うては枕す美人の膝、醒めては提る天下の權、千軍萬馬ル死の間に於て、猶且つ倥々餘裕ある英雄が風流韻事閑日月の逸興を寫すに倥々たる筆致を以てす、

野利秋○高山正之○梅田雲濱○梁川星巖○坂本龍馬○桐生彪○陸奥宗光○木戸孝允○後藤象次郎○關鐵之助○四條隆謌○鄕隆盛○佐久間象山○藤井小蘇○種田政明○森有禮○福岡孝弟○小松帶刀○大久保利通及び其時代の史傳は即ち維新政業の記事は實に近世歷史中の精華にして類るる趣味に富み、最も考究の要あるもの多し著者夙に「高杉晉作」「木戸孝允」の二傳を著して好評噴々たり今此傳を草して薩長傑士と近代國事との關係を詳に併せて明治政府の由來を觀察するに最も精密國史に志すもの一本を購うて可なり、

日本歷代無慮數百名の偉人が品操、氣韻、深慮、膽識、修養、洒落、雅量等各方面に渉て特出し後世の模範となる可き其平生と裏面の性行を寫す有爲の青年が以て志氣を養ふの好侶伴たるに適す、

立身成功の事偶然之を求む可からず然らば其策如何即ち唯健、敎習、實驗の三者と百折不撓の精神と是れなり今これを細目に分つ事二十箇條叙述可愕親切只管育年成功の道を解き兼れて失敗の因を敎ふ附錄には今世人士の生年表、吾大學生特辭三對表、各藩貢進生表の三篇を添へたり實に机上の好裝飾たり、

文學士梶川鳥城君序　林稻洲君著

婦人 理想の良人

此書は未婚の男女兒を持てる父母兄姉の一讀を要す未だ要を迎へざる男子の爲めに未だ嫁せざる女子の爲めに親切なる勸告と撰擇法を說く此書を讀みたるものは妻を離別するの不幸なく離緣せざる懸哀に際會せざるべし要するに此書は未婚の男女に向て絕好の座銘なり、既婚の婦人に向て無双の敎訓書なり

價十七錢　郵稅二錢

文學士辰巳小次郎君序　岩井松風軒君著

遊仙窟評釋

遊仙窟は唐の文張戲が仙女に託して自己の艷麗巧妙なる筆の艷想を敍述したるものにして々筆せらる我國には十有餘年前學士伊時なるもの勅命を承け靈龜の膝下に讀訓點を受けたりと傳ふ馬琴等が古來文士の愛誦せしこと當り此書に就き所甚だ多し又本書に關する所甚だ多し又本書訓讀解釋の三點に分ち最も平易の語句を用ゐ通俗的に評したるものなり、

四版　價廿五錢　郵稅四錢

信夫恕軒翁序　岩井松風軒君著

長恨歌評釋

長恨歌は唐の文豪白樂天の詩作也○玄宗皇帝好色の顚末也○文章巧妙絕倫也○作詩作文の模範資料也○青年學生座右の珍寶也、

三版　價十三錢　郵稅二錢

宮崎來城君序　吉田鉉南君著

唐代名著作 美人傳評釋 白樂天傑作 琵琶行評釋

本書は鶯々傳、章臺柳傳楊娼傳並に琵琶行を飜譯、釋義、解釋に分ち最も通俗に解釋せるものなり來城氏本書に序して曰く方今文士の漢文を讀むもの多くは六家八家の門扉を窺ふの外、復た片眼の艷辭に渉るなし之を矯むるは遺種の文を示し把玩三昧以て別樣の詩情を知らしむるに在りと、

四版　價廿五錢　郵稅四錢

宮崎來城君序　金田雪窓君著

女流の偉人

本書は我邦の國媛才女に係り、亞ら異邦の人物を加へず、これ我邦には我邦の奇粹あり、特色あり、神韻あり、精華ある所以にして或は德行を以て著はれ才色を以て勝れる必ずしも一定せず而して書中時に校奇姐娼を挿記するは砂裏の黃金泥中の蓮花なきに非さるを以てなり、苟くも世の婦人良嬌賢母となる志おらば必ず一本を備へざる可からず。

岩井松風軒君著

情の清盛

入間を觀察するに最も趣味あるものは、是れ情也日本史上の一名物、平相國を見るに此一面あり、何ぞ折花の逸興と言はんや、何ぞ柳の飮興と言はんや、著書が暢達なる筆は此一怪傑に生命を與へて如何に能く百花の爛漫たる春光を此書の裏に現出せしめんとするぞ

六版　價廿八錢　郵稅四錢

公爵近衛篤麿君序　島田三郎君序　法學士桑田熊三郎君序　法學士中村進午君序

柳瀨勁助君遺著

社會外の社會 穢多非人

全力を盡くし穢多非人の生活、信仰、道德、婚姻、職業、交際、起源、人口繁殖、沿革、過去、將來、研究、其結果を公表するに至らずして遯れられし柳瀨勁助氏の遺書にして別天地たる該社會の奇習一として洩らすことなし、

三版　價廿五錢　郵稅四錢

渡邊修二郎君著

奇傑雲井龍雄

雲井龍雄詩文を揭ぐ、

肖像入　價貳拾錢　郵稅四錢

渡邊修二郎君著

俠傑高田屋嘉兵衞

嘉兵衞是れ市井の一夫のみ、而して國家の爲めに一性命を捧げ、國事を謀りて海外に就れ、遂に國事を成し遂げずして彼我の間に事情を疏通して彼我の間に平和を圖りて事局を結了せるを得たり嗚呼奇傑者頃日露交涉の事頗る其多趣多味なること遙に小說稗史の上に在り、

肖像入　價貳拾錢　郵稅四錢

國府犀東君序　香川怪庵君述

文士政客風聞錄

力今其名聲を博したる政治家、文豪が奇話珍聞を蒐めたるもの、滑稽あり、洒落あり、豪放あり、奇嬌あり、風流あり、悽慨あり、面目躍如として紙上に活動す、

價拾五錢　郵稅貳錢

16/12/35

博言博士イーストレーキ君著

英作文添刪詳解

再版　價廿參錢　郵稅貳錢

「イ」氏門生の英作文數多を撰擇して、字々句々に精密の添刪を加へ、其全文には全體の評論を下し、以て英作文練習の方針を示し、邦文を以て添刪評論の理由を詳說したる英學界未曾有の珍書なり、

博言博士イーストレーキ君著

英和通辯 日用單話自在

三版　價參拾錢　郵稅四錢

英米日用の慣用語句一千數百を集めて之を二十種に類別し同氏自ら正確の發音を施し加ふるに末尾に單語數百をも類別に附しあれば初學者は勿論特に中學生座右必須の良書なるべし、

菅野德助君著

フランクリン自叙傳詳解

再版　價參拾錢　郵稅四錢

國民英學會講師として「實用英語」記者として英文の註譯を以て芳名噴々たる菅野氏が其精緻なる頭腦により詳密の註解を下せしものなれば坊間流布の蕪雜の書と其の選を異にするは勿論實に中學生必携の書、

文學士宮本正貫君序　虎城山人編

作文必携 助字用法詳解

四版　價拾五錢　郵稅貳錢

●也、矣、焉●乎、哉、耶●耳、爾、已●殆、幾●蓋、夫、抑●即、乃、轍、即、便●猶、尙、仍等の助字數百を類集し、各字の意義、用法、異同等皆實例を擧て詳說せり、

侯爵西園寺公望君題字　岡鹿門君序　財間榮君編

作文必携 熟語成句詳解

六版　價廿五錢　郵稅四錢

故字熟語數千を集めて、之を精密の意義、文字の出處、故事來歷を詳說して、之を「いろは」別に區別し、尙ほ索引に便なる爲め種類目錄をも付しあれば引用に便にして、文筆に從事せるもの座右必須の要典なり、

文學士宮本正貫君序　虎城山人編

漢文速成 和文漢譯秘訣

價拾五錢　郵稅貳錢

和語を漢語の語勢に變更する練習法なり復文十數例を擧げて實字、虛字、助字の用法及語句の轉例配置を一字一字詳說し又譯文の異同を識別し譯文の運用變代を會得せしむる爲同一文を數種に漢譯したる名家の和文漢譯例を示し譯文の方法秘訣を詳說せり、

法學士加藤正雄君序　南海道人編　（挿畫三拾二個）

書法秘訣 習字速成圖解

三版　價拾五錢　郵稅四錢

本書は永字八法、草字筆法、一文字五形修練術、忍返し筆法執筆法等を總て圖を以て詳說し、其他執筆運筆、姿勢、習識、四修、習情、文學之懷、筆勢、筆拍子、去欣、墨色生字死字病字等の秘訣、魏大祖、王羲之、晉成帝、柳公權、東坡等の書法極意より書跡の種類、筆道の用具に到るまで詳細不漏、

緒方流水君序　石橋玄潮君著

新體詩指南

再版　價廿五錢　郵稅四錢

新體詩の性質を明にし、其作法を詳說し、附するに之が模範たる作例と、之を組織すべき資料たる類語を蒐集したるもの、新體詩自修の指南車は本書を措て何れにか之を求めん、

石橋玄潮君編

韻文 花天月地

再版　價廿五錢　郵稅四錢

本書收むる所は、當時有名の新體詩人の作にして其萃を拔き其精を選びて之を集む、其數七十有餘題當に是れ四時花鳥風月の友天地の有情を敎ふるものは即ち之なり、

文學士栗田木岡君序　渡邊幾石君編

美文資料 美辭麗句

三版　價廿錢　郵稅四錢

本書は部門を季候（春、夏、秋、冬）地理、天文、人品、品性、人情及人事等に分ち更に百有餘の細目に分ち以て索引の便を計れり蓋し作文の好資料にして苟しくも文筆を弄するの士が座右の友として裨益少なかちざるを信ず、

96
109

早田玄洞君著

錬膽夜間遠足

價廿錢
郵税四錢

暗々として咫尺を辨せず星斗闌干として、怪獸叫ぶ殿傷男子と雖も、心自ら靜なる能はざるものなり、夜に於ける山岳、夜に於ける溪谷、夜に於ける町、夜に於ける村、夜に於ける神社佛閣、夜に於ける娼樓酒家、凡てこれ三更鐘聲陰々たる時これを跋渉しこれを目擊しこれに逢着せるを寫せるもの、漫然たる旅行記とは蓋し雲泥の差違あるのみならず膽力の養成を思ふもの先づ一本を購ふて可なり、

池田錦水君著

戀の解剖

價廿錢
郵税四錢

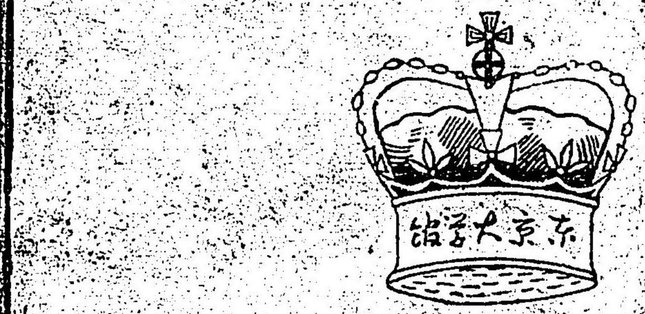
初戀、見ぬ戀、片戀、忍ぶ戀、道ならぬ戀、言はぬ戀、及ばぬ戀、逢へぬ戀、遂げられぬ戀、虚僞の戀、誠實の戀、浮氣なる戀、戀ならぬ戀、戀のつらさ、戀の悲しさ、戀のうれしさ、戀のたのしさ等凡て戀愛の眞理を解剖して餘蘊なし精神的戀愛を研究せんとする者は是非一讀せざる可からず、

池田錦水君著

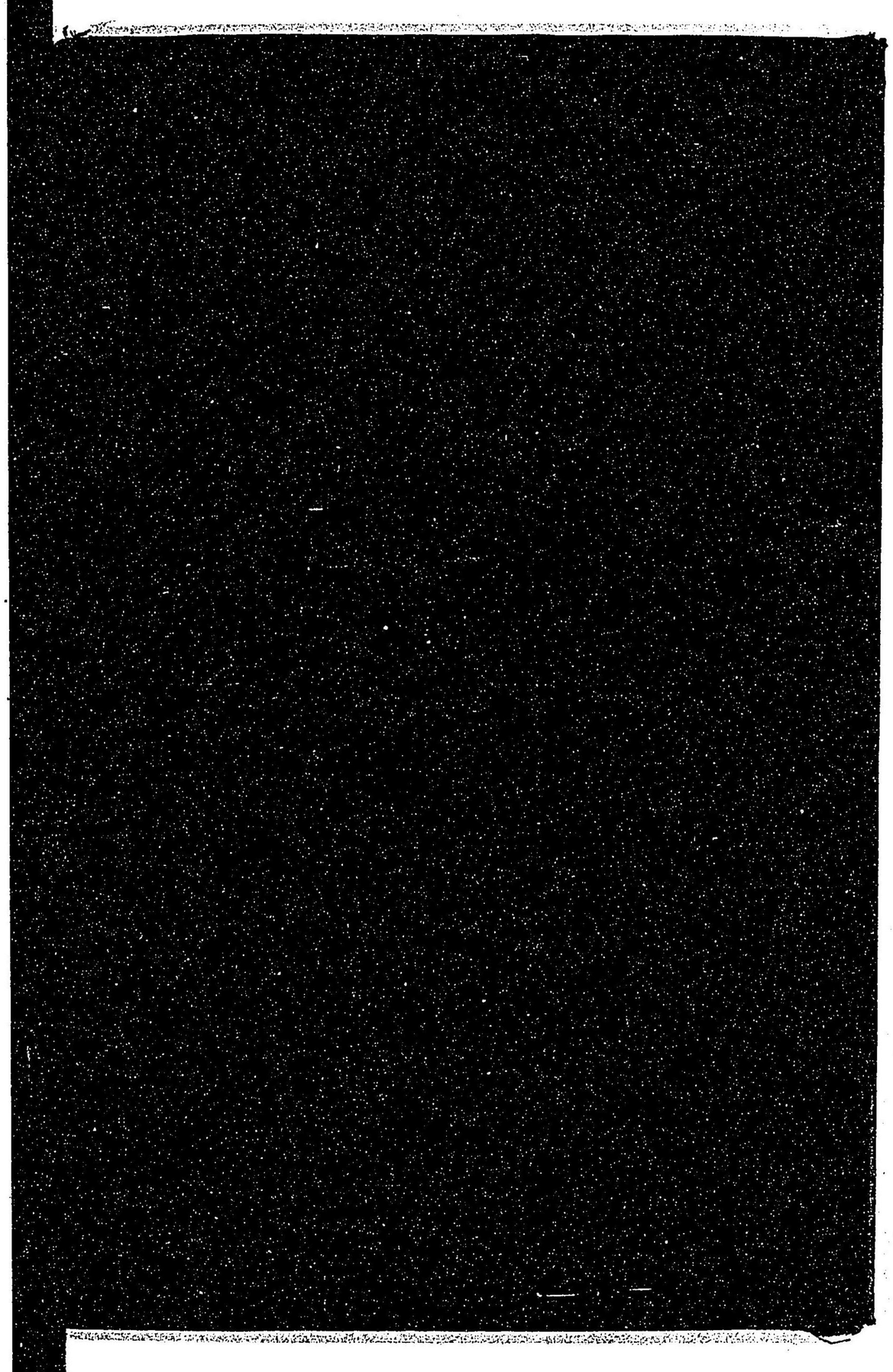
女學生氣質

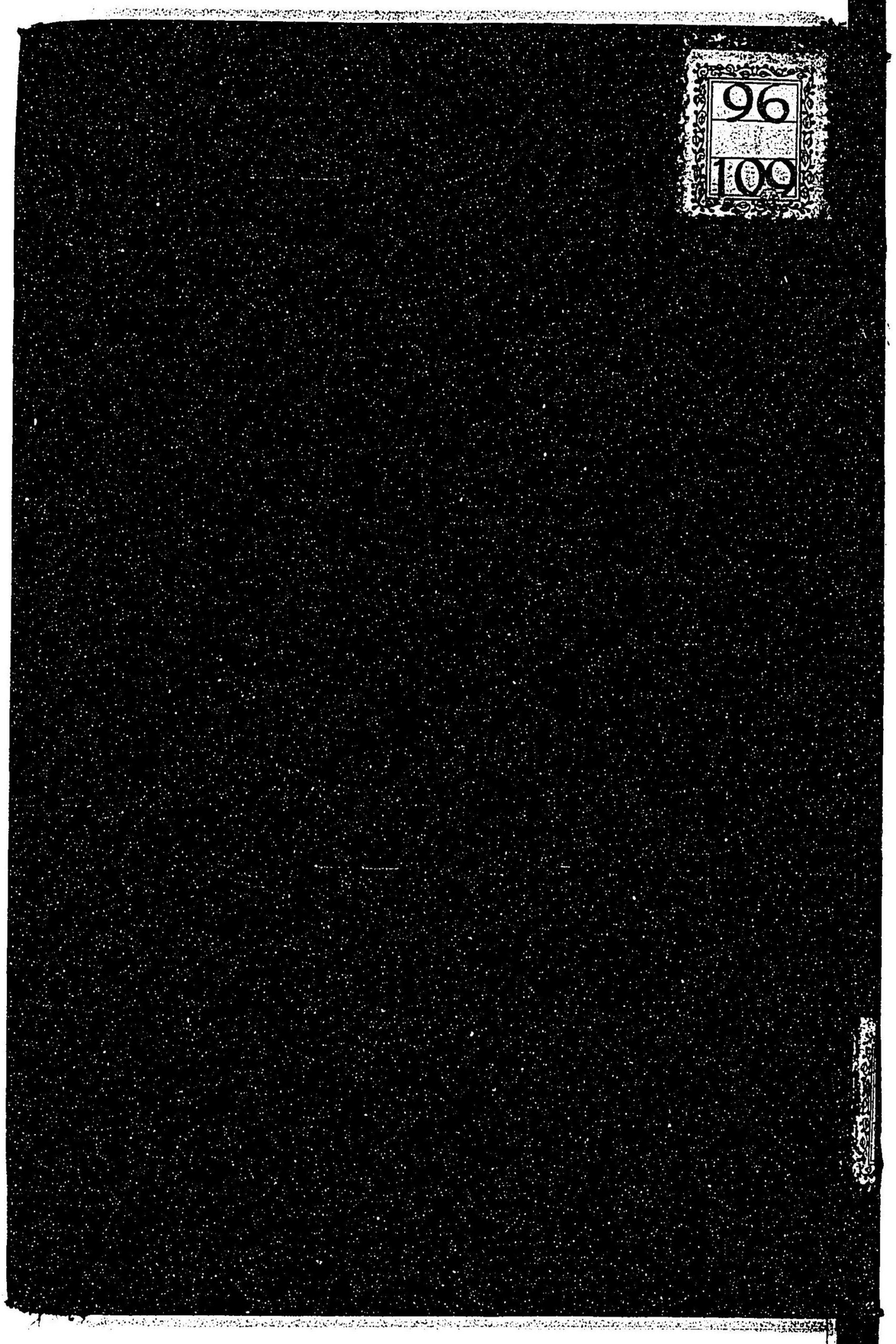
價廿五錢
郵税四錢

決心、決定、秩別、着京、入學、寄宿舍、見物、寄席、教場、芝居、親友、相談、轉宿、下宿屋、貸本屋、戀人、融通、失戀、自暴自棄、露見の各項に分ち當今の女學生氣質を小説的に描きたるもの、行文の流暢にして趣味多きは勿論よく時弊を穿ち得て妙言ふ可からず、


东京大学图书馆

Arb
109



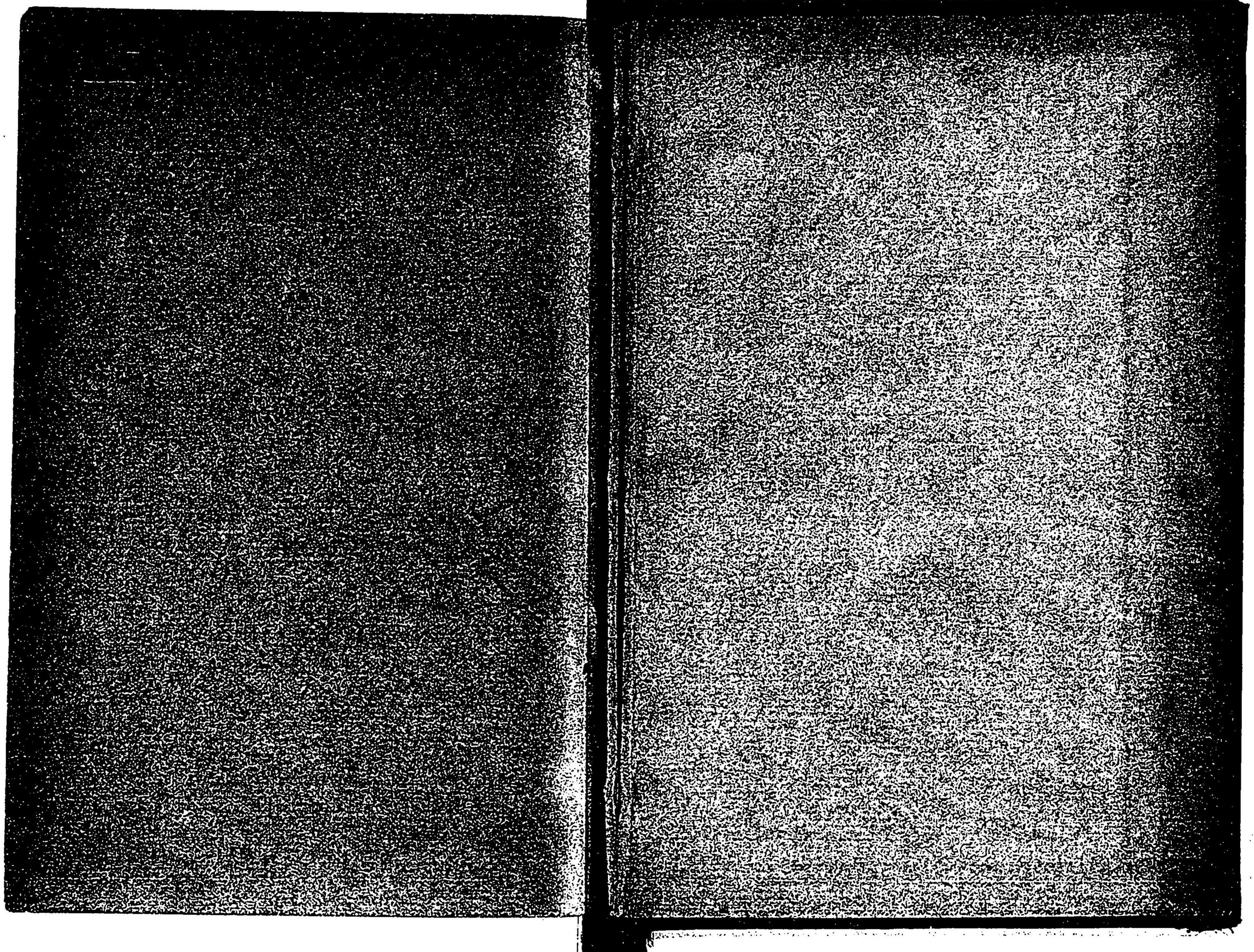


019638-000-0

96-109

禅の人物鍛成

早田　玄洞／著

M35. 11

ABG-0418